

# 望む幸せのかたち



## 望む幸せのかたち

作者：宮津怜佳

概要：西洋風架空世界を舞台に、「夢見る乙女」と「夢見ない乙女」が繰り広げる、コミカルシンデレラストーリー。

古い師も三代続けば名門と言えるだろうか。

もし言えるならば、マーシャル公国の城下町エフシの占い師であるスウ・ハウディは、名門中の名門だと言えよう。何しろ彼女の家系は、彼女の曾祖母の代から、この場所で占いを営んで来たのである。まして、彼女の祖母に至っては、その占いが当時のマーシャル公の政治的決断を左右する程の力を持っていたというのだ。

だが、時の支配者が占いに頼っていた時代は、とうに終わった。今では、スウの占いを求めてやってくる客と言え、輝かしい明日の華々しい恋愛を夢見る、街のうら若き乙女達が大半であった。その大多数の客達にとって、スウの家系が由緒正しかろうが何だろが、関係のないことである。彼女達にとっては、自身の友人が言う「あそこの占いは、きついことも言われるけど、すごく良く当たるのよ」という言葉こそが、スウの占いを求める一番の動機と成り得るのだ。

その日もスウは、夢多き乙女のたわいもない（本人にとっては非常に重要かつ深刻な）悩みを聞き、代々受け継いだ占い札を駆使して、その解決に向けて協力していた。いつも通りの繁盛振りだったが、その客足が、ぴたりと止まった。ふと窓の外に視線をやると、まだ日の沈むには早い時刻だということに、薄暗い。と思うと、ぽつぽつと水滴が、宙を落下して行くのが見えた。

「……夕立、か……。今日は、これで店仕舞い、かな」

スウが呟いた。その言葉を発する僅かな間で、既に雨は、地を叩きつける滝に変わっている。そんな激しい雨の中、わざわざ占いをしに出掛けるようなもの好きは、確かにおるまい。スウは広げた占い札をまとめ、片付けに入った。

そのとき、

「あーんっ、もうっ！ あともう少し、降り出すのを待ってくれば、よかったのに！」

と、入り口の方で声がした。

その声は、スウの見知ったものであった。彼女の幼馴染であり、今ではエフシの人々の信仰を集める森の神殿の女神官である、マリィ・アージュの声である。まとめた占い札を机の傍らに置きつつ、扉が開ききるのを待たずに、スウはマリィに声をかけた。

「マリィ、タオルを貸しましょうか？」

「あ、スウちゃん、私は大丈夫よ。ありがとう」

ハンカチで髪や肩についた雫を払いながら姿を見せた人物は、にっこりと笑顔で返した。

マリィは、栗色の柔らかく波打つ髪は艶やかで、霽田気の柔らかい、美しいというより可愛らしいという形容がぴったりとくる人である。決して劣る容姿の持ち主ではないが性格的に粗暴であるスウは、その昔は——今は全く気にしなくなっただけで、今でもそうなのかもしれないが——女らしさを絵に描いたようにたっぷりと所持しているこの幼馴染と比較されては、なんとなく肩身の狭い思いをさせられたものだった。

過去の話はともかく、今、その幼馴染は、

「それより……」

と、大きく扉を開ききってから、更に言葉を続けた。

「彼女に貸してあげてくれない？」

そして、促して、一人の女性を中に招いた。

「こ、こんにちは……」

おずおずと入ってきた女性を見て、スウは少し驚いた。彼女が初めて見る人物だったが、その余りの美しさに、はっとさせられたのである。

人の目を引く、見事に整った顔立ち。大きな瞳はとても印象的である。髪も、マリィと同じく波打つ柔らかな髪だが、その色は淡い金色で、薄暗いこの状態でも光輝いて見えた。大よそ、文句の付けようのない美人であった。只一つだけ何を言えば、どうも背が高すぎるらしい点ぐらいか。とにかく、その自信なさげな態度が似つかわしくない、完璧な容姿の持ち主であった。

「あ、あの、私も平気です。余り濡れてませんから……」

その女性が、言いながらぱたぱたとスカートをはたくと、水滴が軽く跳ねた。その動作の無造作加減も、彼女の容姿には似つかわしくなかった。

スウは、そのように色々観察していたが、マリィは、特に気にするところはないらしい。

「そう？ じゃ、まあ、こちらへどうぞ」

と、人当たりの良い笑顔で、彼女をスウの前まで押し出した。

「さ、座って」

更に、強引ともいえる世話焼きっぷりで、マリィは、女性を椅子に座らせる。占い客の席である。

「占いの間は、私は外にいるわね」

座った女性の視線に、自分の視線を合わせて、マリィが言った。すると、女性は慌てて手を振る。

「え、ち、違います、私、占いをしてもらいに来たんじゃ……」

「あら、そうなの？」

マリィがきょとんとした表情をする。

「じゃ、どういうご用件？」

ぶっきらぼうに言ったのは、スゥである。何時の間にか自分も椅子に座り、真正面から女性を見る。見られた女性の方は、

「あ……いえ、その……」

と、戸惑って口を閉じた。

「もう、スゥちゃんったら、そんな言い方しなくたっていいじゃない」

「お客でもない人間を引っ張ってきておいて、何を言うのよ」

マリィがかばう様子を見せても、スゥは素知らぬ振りだ。

そして、この程度の応酬は、二人にとっては日常茶飯事であり、別に険悪になっているのではなかったのだが、女性はそうは思わなかったらしい。

「あ、すいません」

と、慌てて口を挟んだ。

「私、本当に、ここに用事があった訳じゃないんです。ただ、急に雲行きが怪しくなったから、ここの軒先に、少し雨宿りさせてもらおうと、駆け込んだんです」

「あら、そうだったの？ 私、てっきりお客様だと思ったから……ごめんなさい」

マリィが、本当に済まなさそうに言った。そこまで悪く感じなくてもいいとスゥなどは思うのだが、それがマリィの性分なのだ。

「いえ、そんな。こちらこそ……」

謝られた女性の方も、同じように返している。この二人、少し、似ているところがあるのかもしれない。スゥはのんびりと、二人を眺めていた。

「で、マリィ、貴方は何をしに来たの？」

「え、私？ 私は……」

言われたマリィは、ずっと手にしたままだった下げ籠を、今思い出したという風情で、スゥに差し出した。

「時間が空いたから、木の実でクッキーを焼いたの。一緒に食べようと思って」

このように、マリィが差し入れを持ってきてくれるのも、頻繁にあることである。家事の嫌いなスゥと違って、マリィは料理が達人なのだ。そして彼女は、何かと作っては、こうして持ってきてくれる。どうせ持ってきてくれるなら、お菓子の類より夕食になるものの方がスゥにはありがたいのだが、今日はそこまでの暇がなかったのであろう。だから、別のことを口にした。

「……濡れたんじゃないの？」

「少しね。でも大丈夫よ……ほら、ちゃんと布に包んで来たもの」

そう言いながら、マリィが、籠の中身を披露する。中では、焼き色も見事なクッキーが、香ばしい香りを放っていた。

「うわぁ……！」

驚嘆の声を上げたのは、スゥではなく、金髪の女性であった。二人が一斉に彼女を見る。それに気付いた女性は、ぱっと顔を赤らめた。

「あ、す、すいません、つい、おいしそうだったから……」

「いいのよ。そんな風に言ってくれるのって、とっても嬉しいわ」

マリィが笑顔で、女性の手を取った。

「よかったら、一緒に食べませんか？ 雨は暫く止みそうにないし。今、お茶を入れますから」

「は、は、はい。ありがとうございます」

赤面のまま、女性が答える。マリィはもう一度彼女に微笑みを送ると、立ち上がった。それから、奥へと入っていった。

そのまま、ぼんやりとしていた女性が、ちらりとスゥの方を見た。彼女はそっぽを向いて、まるで退屈を持って余しているかのように、占い札をばらばらとめくっている。女性の存在にはまるで注意を向けていないかの様子であったので、彼女は居心地の悪さを感じたらしい。

「あ、私もお手伝いしましょうか？」

と、立ち上がり、奥の方へと声を掛ける。

「大丈夫よ。でも……運ぶのだけでも手伝ってもらおうかしら」

そう帰って来たのを幸いに、女性は、マリィの声に従って奥へと入って行った。

こうして二人が机から離れるのも、スゥは、まるで気に留めていないかの様子でいた。が、実際には、全く逆であった。彼女は、女性をずっと警戒していたのである。遊んでいるかのように見えた占い札をめくる動作も、実はマリィや彼女に気付かれぬように、女性のことを占っていたのだ。

ただ、札をめくれどもめくれども、「秘密」だの「偽り」だのといった意味合いの札ばかりが出てくるので、

『妖しいのは、占うまでもなく、分かりきってるの』

と、自分の占いに失望していた。それでも、途中で止めることは出来ず、無造作に札をめくり続ける。そして、最後の札、総合の結果を示す札をめくったその手が、止まった。

「……ちょっとお」

思わず声を出したのは、その最後の札が、「運命的な出来事」を意味する札だったからである。しかも、真っ直ぐスゥの方を向いて出たこの札は、「良い出来事」を暗示しているものだ。誰にとっても「運命的な出来事」かと言えば、この場合、ここにいる全員にとって、ということになるのである。

それまでの単純な結果から、いきなり大層な結果が出たものである。スゥは、その結果の真の意味合いを、読み取りかねた。それで、つい愚痴が口に出たのであった。

そのとき丁度、マリィと問題の女性が、部屋へと戻ってきた。お茶とお菓子を入れた皿を、手分けして持っている。二人は、すっかり打ち解けた様子である。

『マリィったら、全く警戒心というものを知らないんだから……』

世の中に悪い人間など居ないと信じる、それが女神官という職業の必須条件とでも言うのだろうか。やや呆れながら、スゥは、幼馴染の笑顔を眺めやった。

「なあに？」

視線に気付いたマリィが、小首を傾げる。同時に差し出されたお茶を受け取りながら、スゥは「別に」と軽く流した。が、マリィは納得しなかったようだ。

「何なの？……あ、もしかして、何かいいことがありそうな予兆が出てる??」

「別に」

今度は更にあっさりとした調子で、スゥが同じ言葉を繰り返す。マリィは不満げに、ほほを膨らませた。

「酷お〜い。そんなに冷たく否定することないじゃない」

「……いつものことだけど、本当に、懲りないわねえ」

「なあに、『懲りない』って。懲りるようなこと、してる？ただ私は、幸せな結婚に繋がる出会いがないものかって、聞いてるだけじゃない」

「それが、懲りてないっていうのよ。大体貴方の場合は、結婚というよりも何よりも、『結婚式』に憧れてるだけじゃない」

「その何処が悪いの？ 女の子が『理想の結婚式』を夢見るのって、そんなにおかしな事？」

負けずに言い返すマリィだか、スゥは取り合わず、うんざりという表情で首を振るのみである。

「もう、スゥちゃんは、夢がなさ過ぎるのよ。ねえ、貴方もそう思わない？」

「……へ？ あ、はあ……」

二人の会話をぼんやりと眺めていたところを、急に話を向けられた女性が、あいまいに頷いた。

「ね〜、そうよね〜」

マリィが無理矢理同意させている。その様子を見ながら、スゥはふと思いつた。

「そう、貴方も夢があるのね。じゃあ、恋愛運でも、占ってあげましょうか？」

言いながら、スゥは占い札をさりげなく手に取った。これで、堂々とこの不審人物のことを占うことができる、そう考えたのである。

「え、いえ、私は別に……」

「遠慮しなくてもいいわよ。どうせ店仕舞いするつもりだったから、お金を取ったりしないし」

女性はお口籠もったが、企みがあるスゥは、一步も引かなかった。

「遠慮しないで占って貰ったら？ スゥちゃんの占いは、本当に当たるのよ」

と、マリィも口添えをする。無論マリィは、スウの企みなど露程も知らずにやっていることであったが。

「で、でも、私はまだ、結婚とか全然考えてないですし……」

と、女性はまだ躊躇いを見せる。

「そんな、私だって、別に今すぐ結婚とか何とかを考えてる訳じゃないわよ。そんなに堅く考えなくても、いいと思うんだけど」

マリィが唇に人差し指を添えて、言った。ちょっと考えるような仕草である。

「うーん、でも、なんだか勿体ないわね。貴方ほど綺麗な人なら、公子様だって目を止めそうなのに」

「何、『公子様』って」

占い札を持って余しながら、スウが尋ねた。この街で「公子様」といえば、次期マーシャル公爵位を継承する人物のことを差す。現在の「公子様」は、現マーシャル公の一人息子である。そうであるから、スウのこの質問は、「公子様」が誰なのかを問う類のものではなく、何故この場にその「公子様」が話題に上ったのかを問うものであった。マリィも当然、それを承知している。

「うん、噂で聞いたの。最近、公子様がね、お忍びで市外にいらして、なんでも花嫁候補を探してらっしゃるっていうの」

ぱきっと、物が壊れる音がした。女性がクッキーを、手で粉々に砕いたのである。

「す、すいません、ちょっと力が入っちゃって……お話を続けて下さい」

女性は真っ赤な顔で、砕けたクッキーの欠片を、スカートの上に集める。相変わらず、容姿に似合わない、大雑把な動作であった。

そんな観察をしているのはスウだけで、マリィの方は、女性に言われた通りに、気にせず話を続けた。

「ねえねえ、スウちゃん。これ、本当なのかしら？」

「そんな訳ないじゃない」

スウがマリィの言葉を一蹴した。余りの素っ気無さに、マリィがまた、ぷうと頬を膨らませる。

「どうしてそんな風に確信を持って言えるのよお」

「どうしても何も、ちょっと考えれば、分かりそうなものでしょ」

スウは、占い札の山を机にぱたんと置いた。

「公子の婚姻は、外交上の大事な道具となりうるものよ？ 最近、隣国……エネーティ公国との関係が、怪しい雰囲気になってるでしょ。向こうの公族に二、三人、年頃の娘が居るじゃない？ その辺りとの婚姻話の噂なら、まだ分かるんだけどね。しかも、公子自らのこの市街をうろついて女を物色してるなんて、外聞の良い話じゃないでしょ。そんな噂が流れてるなんて、胡散臭いことこの上ないわ」

「冷静なんですわね」

女性が、感心するように言った。が、スウは、賛辞とも取れるその言葉をあっさりと無視して、続ける。

「どっちにしろマリィ、そんな噂を信じたりしたら、それを利用して公子を名乗る詐欺師か何か、騙されるのがオチよ」

「そんなことはないわ」

スウのそんな警告を、マリィはきっぱりと否定した。

「私、公子様と結婚なんて、嫌だもの。マーシャル公の結婚式なんて、古臭くて仰々しいばかりで、絶対にあんなのは嫌」

そんな話がある訳でもないのに、マリィが激しく言う。

「最近、『そろそろ公子様がお年頃になられたから』なんて言うおじい様に、こーんなに分厚い式の手順書を読まされてるのよ。もう、うんざりしちゃうわ」

マリィが神殿の女神官であることは先に述べたが、同時に彼女は、現在の神官長の孫娘でもある。彼女にとって祖父は、仕事上の上司でもあるのだ。

「国を挙げての行事ですもの、当然じゃないの。貴方はそれが仕事でしょ」

「もちろんよ。お仕事な分には、きちんとするわよ。でも、自分がそんな式で結婚するのは、絶対嫌」

「じゃあ、どういう結婚式ならいいんですか？」

言ったのは、金髪の女性である。スウは、露骨に嫌な顔をした。「余計なことを言うな」ということだ。しかし女性は、スウの表情の変化に気付かなかった。何故なら、得たりとばかりに顔を輝かせたマリィが、

「うふ、私ならやっぱりね、季節はそう、新緑の頃でね」

と、語り始めたからである。

「森に緑が溢れる中、神殿に赤い絨毯を敷いて、きらきらした日の光の中を、純白のドレスで歩くの」

うっとりとした様子で話すマリィの方を、スゥは見ようとしめない。もう何遍も聞いた話なので、また再び聞かされるなど、うんざりしているのだ。そんな事情を知らぬ女性は、一々頷きながら、真剣に話を聞く。

「ブーケはね、白いカピルスの花を中心に、ギータカスの葉を混ぜて、長く流れる優雅なものを作って」

と、女性が首を少し傾げた。

「ギータカス……って、あの、棘のある……？」

「あら、棘があるのは、ギータカスの蔓の方だけよ。葉は大ぶりで、蔓から切っても長持ちするし、水につけてやればまた伸びてくる、元気な植物なの」

「へえ……知りませんでした」

「それに何より、ギータカスには、魔を退ける力があるのよ」

「魔を退ける力……ですか？」

「ギータカスは、昔から魔力を嫌うと言われているわ。棘のせいで、あまり一般に用いられることはないけど、多少なりとも魔術を扱う者なら、知らないことはないでしょうね。魔除けの定番ということで」

割って入って説明したのは、スゥである。話が逸れてきたのを幸いに、話題の転換を試みたのだ。

そしてその試みは、上手く行った。女性が、

「魔除け……」

と、考え込んだのである。

その様子に「やっぱり何かあるのね」と察したスゥは、先程の「堂々とした不審人物のことを占う」という企みを実現させるべく、彼女に追い討ちをかけた。

「何か、気になることでもあるの？ 良かったら、話してくれたら、占いできっと力になれると思うわ。必要なら、ギータカスの魔除けも作ってあげられるでしょうし」

「……………」

女性は、更に考え込んだ。その深刻な様子に、少し前まで自分の話をしていたことなど忘れて、マリィが心配げな視線を注ぐ。

「まあ、困ったことがあるのなら、私も相談に乗るわ。私も一応、神官ですもの。神のお力で、少しは貴方のお役に立てると思うの」

「……マリィさん……ありがとうございます」

その、必要以上に同情的な態度が、女性の心を動かしたようだ。俯いていた顔を上げてマリィの方を見、にっこりと微笑んだ。

「そう……大したことでは、ないんですけど……」

女性は、ゆっくりと話し始めた。

「最近、身の回りの物が良く壊れるんです。日常使いのカップが割れたのに始まって、枕が破れてみたり、灯りの傘にひびが入ったり……」

「貴方の周りの物が？ 触りもしないのに？」

これまでに得た女性に対する観察結果に基づき、『それは貴方の拳動が粗暴だからじゃないの？』と邪推したスゥが、言った。だが女性は、きっぱりと首を振った。

「触れてもいないのに、です。幸い、破片で怪我をする者は出ていませんが、周りのも……」

そこで、ちょっと言葉を切って、慌てて言い直す。

「え……か、家族が、気味悪く思い始めていて」

マリィはその言い直しを聞き流したが、スゥは勿論、聞き逃さなかった。生活空間に『周りのもの』などという他人が存在し、またそういう言葉を使うということは、彼女は使用人に世話をされている身分であることになる。

そこまでの推理をしながら、スゥは、手早く占い札を繰り始めた。滑らかな手さばきで、机上に札の山を三つ作る。

「じゃ、占いましょう。貴方の名前は？」

「ウィ……」

言い差して、女性ははっと口を開ざした。

「ウ？」

スゥの視線が女性の顔を射る。

「う……え、あー……の、そ、ソイエです。ソイエ・ナショパナ」

「あ、そう」

スゥが、じっと女性の——ソイエと名乗った人間の瞳を、見た。彼女はへらへらと、美しい顔を台無しにしかねない、ぎこちない笑顔を作っている。

「……本当に、嘘をつくのが下手ね」

スゥが呟いた。小さい呟きだったので、マリィにも女性にも聞こえなかった。

「え？ 何か??」

「何でもないわ。占いを始めるわよ」

ぱしっと宣言すると、スゥは、机上に置いた占い札の山の内、真中の札を取った。残り二つをその山に合わせて、再び一つの束を手にした。

マリィと自称ソイエ嬢が、スゥの動きを息を詰めて見つめている。が、二人の視線など全く感じていないかのように、スゥは音も立てない落ち着いた手つきで、占い札を操ってゆく。あっという間に、机の上に占い札が配置された。

「まずは、当事者である貴方」

解説を加えながら、スゥが一枚の札をめくった。

「……貴方がどこのお嬢様だか知らないけれど、その家柄は大したもののようなね」

先程、スゥ自身が推理したことを裏付ける札であった。正面からはっきり言ったのは、嘘をつくのが下手なこの女性が、なんらかの反応を示すだろうと思ったからである。上目遣いに女性を見やると、案の定、女性の表情には動揺が見て取れる。

「え、いえ、そ、そんなことはないんですけど……」

「あら、私の占いは、こんな最初から外れてる？」

「いえ、あの……」

女性は言葉を失ってしまっている。

これらの反応で、スゥは、この女性はどこぞの家のおてんばお嬢様に違いない、と判定していた。家人の目を盗んで、街に遊びに出ている、というところではないか、と。また、容姿は良くても所作が粗暴ということは、そのような躰は受けていないということである。すると、正妻ではなく側室の娘で、最近引き取られたといったところだろうか？

もっと突付けばはっきりすると思ったが、

「もう、スゥちゃん、そんな意地悪な言い方しなかったって」

と、マリィに咎められたので、それはしなかった。

マリィもいい加減、正体が怪しいことに気付いているだろうが、だからといって、彼女の味方をする立場を変えるようなことはないだろう。神官たるもの、弱きを助けるのが常だと、マリィは信念を持っているのだから。

分が悪いと見たので、スゥは素直に次に進んだ。占っていけば、詳しいことは幾らでも探ることができると考えたからでもあったが。

「次は、この問題そのものについて」

と、スゥが解説を口にしたとき、マリィが俄かに顔を上げた。

「なに、マリィ。どうしたの？」

表に返すために札を持ち上げた手もそのままに、スゥがマリィを見る。

マリィは薄暗くなった窓の外を、不安げな表情でじっと見つめていた。その彼女の胸元が、何故だか光っているように見えた。

そこで、スゥははっと気付いた。反射的に机にうつ伏せて、まるで札をかばうように、広げた占い札の上に覆い被さる。

残った女性は、突然の二人の奇妙な行動に啞然とするばかりであった。が、二人を見る視界の端で、自分に割り当てられたカップの淵が、ぴしりと音を立ててひび割れようとしているとの見つける。女性は咄嗟に椅子から離れ、カップを取って自分の腕の中に包み込み、床にうずくまった。

それらの行動が終わるか終わらないかの頃、マリィの胸元から、眩い光が部屋中に広がった。

ほんの数秒間であったが、占い小屋全体が光に包まれた。外から見ると、丁度小屋全部が、シャボン玉の中に入っているかのような光景が生まれたのだが、中にいる人間には知る由もなかった。

光が収まった頃、

「……びっくりしたあ〜」

胸元を両手で押さえたマリィが、声を上げた。

「おじい様の御守が、こんなに激しく働いたのって、初めてだわ」

スゥはそれを聞きながら、ゆっくりと顔を上げた。その動作の途中で、右手に持ったままだった占い札が、何気なく見えた。先程めくろうとしていた占い札である。今は、スゥの方に札の表が向いている。スゥは、一瞬動きを止めた。

「……それだけ、とんでもないモノが来たってことよ」

札を見つめたまま、スゥはマリィに返した。

「『とんでもないモノ』？」

マリィが首を傾げる。が、ずっと立ち上がったスゥは、マリィに構わず、床にうずくまったままの女性に声をかけた。

「もう大丈夫よ」

女性は、おそろおそろ、顔を上げた。そして、部屋が先程と変わらない様子なのを確認すると、ほっとしたように顔を緩めて、ゆっくりと立ち上がる。右手に持っていたカップも、机の元の位置に戻した。

すると、女性の表情とは対照的な、厳しい顔つきのスゥと、目が合った。

「この札は、さっきの札。つまり、貴方の抱える問題の本質を表現する札よ」

スゥは、ずっと札を、前に突き出して見せた。それは、暗い色彩の絵柄で、禍禍しい雰囲気やを湛えた札であった。その不気味さにぎょっとした女性は、札とスゥの顔とを交互に見ている。

「これは、『魔』を示す札よ。魔術は勿論のこと、『魔物』を表すことすらあるわ」

「ま、も、の……？」

「そして今の、マリィの御守の発動。これは、マリィのおじい様が、マリィに持たせたものよ。魔除けどころじゃなくて、積極的に魔に対抗する力のある、特製の御守。そうよね？」

女性から目をそらさずに、スゥはマリィに同意を求めた。ただならぬ雰囲気やに押されたマリィは、

「え、ええ」

と、控えめに返答する。

「まさか本当に魔術が絡んでるなんて思ってなかったけど、間違いはないわ」

スゥは、占い札を降ろして腕を組んで、言った。

「貴方、悪意をもって魔術をかけられているわね」

女性は、スゥの言葉を、まるで異国の言葉でも聞いているかのように、呆然と聞いている。そんな彼女の様子に構わず、スゥは強い調子で続けた。

「マリィのお陰……正しくはマリィの御守のお陰で、なんとか無事だったけど、危うく大事な占い札を穢されるところだったわ。それでも、この部屋は駄目ね。少なくとも、一日はかけて清めないで、とてもじゃないけど占いなんて出来ないわ」

「私のせい……なのですね」

女性が、ようよう口を開いた。

「そんなこと……！」

マリィが割って入る。

「そんなこと。ソイエさんは、いわば被害者なんでしょう？ 貴方のせいだなんて、そんなこと思う必要はないわ」

「でも、彼女のために、関係ない私達が巻き込まれたのは確かよ」

「スウちゃん！！」

女性を精一杯庇いたてるマリィの言葉も聞かぬげに、スウはきっぱりと言ってのける。マリィが言い返そうと口を開きかけると、それを、庇われている女性の方が制した。

「マリィさん、いいんです。スウさんのおっしゃる通りですから」

「ソイエさん……」

「そんな風に、優しくして下さるのは、とても嬉しいです。ありがとうございます、マリィさん」

先程までの遠慮がちでたどたどしい物言いから一転して、女性は凜として言った。

「私は自分の置かれている状況を甘く見ていたんだ、ということが、よく分かりました。そのために、お二人にご迷惑をおかけしてしまって、本当に申し訳ありませんでした」

「そんな、迷惑だなんて……」

心配げな顔を見せるマリィに、女性はにっこりと微笑んでみせた。それから、笑みを消して、スウの方へと向き直った。

「私は、魔術をかけられているんですね？ 最近の異変も、気のせいではなくて、それが原因だと」

「ええ。断言するわ」

スウは素っ気無く答えた。だが、女性には十分な返答であったらしい。

「そうですか。それが分かっただけでも、助かりました。占って頂いて、ありがとうございます」

言ってから、一礼する。スウは知らん顔で、彼女の方を見ることもなかったが、女性は構わずに、マリィの方へと向きを変えた。

「それから、マリィさんのお陰で、私も無事に済んだということなんですか？ 本当に、ありがとうございました」

そして、今度はマリィに一礼する。マリィが言葉に詰まっているのに、女性は穏やかな微笑を送った。

その後、びっと姿勢を正して、今度は二人に向かって、言った。

「それでは、これ以上ご迷惑をかけないうちに、私は失礼します。どうやら雨も止んだようですし。……お二人とも、本当に、ありがとうございました」

それから、踵を返して、女性は外への扉へと向かった。

「あ……の、でも、魔術をかけられてるなんていうのに、一人で出歩くななんて、危ないわ」

マリィが引きとめる。女性は、一瞬足を止めて振り返ると、やはりきりりとした微笑を示したまま、言った。

「魔術が絡んでいるというのなら、頼るあてがあります。大丈夫です。……マリィさん、心配して下さって、ありがとう」

「……ソイエさん……」

毅然としたその態度に、マリィもそれ以上、かける言葉を見つけられなかった。

女性は、再び扉へと向き直ると、今度は振り返ることなく、占い小屋を出て行った。

なす術なく、マリィは女性が出て行った扉を見つめ続けていた。が、そんな彼女に構わず、スゥはさっさと片付けを始める。

まずは、ばらばらになっている占い札を集めて一つの山にし、引出しから取り出した紫紺の布で包んで、自分の懐へと仕舞った。

それから、今度は棚から小箱を取り出し、部屋の壁の周りを順番に回り始めた。ときどき立ち止まっては、小箱の中の砂を一つまみずつ、撒いてゆく。

スゥの行動をぼんやりと見ていたマリィも、一つ溜息を吐いてから、彼女の後に続くように、部屋の周りを回る。部屋の四隅に辿りつく度に、胸の前で手を握り合わせ、祈りを捧げた。

部屋を一周すると、スゥは、小箱の代りに小さな香炉を取り出して、最後に部屋の中央に移動した。床に香炉を置き、火をつける。白い煙に伴って、独特の強い香りが部屋中に広がって行く。スゥの後に付いて同じく部屋の中央に移動したマリィは、床に跪いて祈りを捧げた。

これらは全て、この部屋を清める作業であった。祈りが終了してマリィが立ち上がった時点で、二人の作業は完了している。

マリィが顔を上げたとき、スゥは机の側に立っていた。一点を見ている。視線の先は、先程の女性が持っていたカップである。スゥは、何気なくそのカップをはじいて見せた。途端、カップはひび割れて、二つに見事に割れた。マリィが「きゃ」と小さい悲鳴を上げる。

「全く、空だったから良かったものの、中身が入ってたらどうするつもりだったのかしら」

「……ちょっと待って、さっき、彼女、そのカップを抱えてたわよね……？」

スゥが呟くように言った言葉で、マリィはふと気付く。

「彼女がうずくまっていたのは、驚いたからじゃなくて……」

「多分、これがひび割れるのに気付いて抱え込んだんでしょね」

「私達をかばってくれたの？」

「多分ね」

スゥはあっさりと言ってのけた。マリィはそれを聞いて、眉を吊り上げた。

「スゥちゃんったら、それが分かってたのに、それなのにあんな意地悪な言い方をしたの?!」

」

「あれは、試したのよ」

割れたカップを片付けながら、スゥは答える。

「彼女が、マリィの御守りを当てにするかどうかをね」

「どうしてそんなこと、試したりしないといけないの？」

そう尋ねたマリィに、スゥは首を軽く振った。

「貴方がそうやって、人を警戒しないからよ」

言われたマリィが、不満げにぷうと頬を膨らませた。スゥは続ける。

「例えば彼女が、始めから貴方を神官だと知ってて、それで利用しようと貴方に近付いたってことだってありえるでしょ。彼女は自分については、何一つ本当のことを話していないのよ？」

」

「彼女が嘘の名前を言ってるっていうのは、私にも分かったわ。でも、スゥちゃんが占ったように良家のお嬢様だったりするなら、名前を言うのを憚ったって、そんなに不思議はないんじゃないかしら」

「彼女の嘘は、名前だけじゃないと思うけど？ でも、ま、それはいいわ」

言いながら、スゥは椅子に腰掛けた。そして、先程仕舞った占い札を取り出して、無造作に一枚引き抜いて、見る。

「取り敢えず彼女は、本当にただ偶然、ここに来たみたいね」

「だから始めからそう言ってるじゃない」

「貴方がどう思っているかじゃなくて、彼女がどういうつもりだったかってことが問題なの」

言い返すマリィに応酬するも、スゥはそのまま話を流した。

「それももう、どうでもいいわ。とにかくマリィ、貴方、彼女のことが気になる？」

「そりゃあ、勿論心配だわ。だって、魔術をかけられているんでしょ？」

「『頼るあてがある』って言ってたじゃない」

「そうだけど、でも、直ぐにそのあてに頼らなかつたってことは、そう簡単には頼れないってことじゃないかしら。だったら……」

マリィの言葉を聞きながら、スゥは、占い札の山からもう一枚、札を抜いた。

「そう。じゃ、気になるのなら、様子を見に行きましょうか」

一瞬の間があいた。その後、スゥの言葉を理解したマリィの顔が、ぱあっと輝いた。

「スゥちゃん！」

「ま、私達を策略にはめようとしている訳でもなさそうだし、だったら、一旦関わってしまったことだしね。魔術が相手だと言っても、そうと分かってさえいれば、私にとっても貴方にとっても、さして怖い相手じゃないし」

それから、スゥは、引き抜いた札をマリィに披露した。

「彼女は、ここから北西……森の方へ行ったみたいよ」

「そう、森の中なら、みんながきっと助けてくれるわ」

明るい調子でマリィが言う。

「当てにしておくわ」

軽い口調で返したスゥは、早速立ち上がって、出掛ける準備へと取りかかった。

そして二人は、手早く部屋を片付け、戸締りを済ませると直ぐに、占い小屋を後にしたのであった。

スゥとマリィが森の中に足を踏み入れた頃には、辺りの景色はすっかり夜のそれに変わっていた。明日に満ちることを控えた月の明かりは存外明るかったが、それでも、昼のようにはいかなない。スゥは手提げの灯りを手に、道を知るからかさくさくと歩いていくマリィの後を、着実に着いていった。

そうして森を進むこと暫し。二人はぎょっとして、足を止めた。

「う……わあああああっ！」

と、森の静寂の中に、悲鳴が響き渡ったのだ。

声は若い女のそれである。が、叫び方には色気も可愛げもない。

「今の……もしかして、ソイエさんかしら？」

「多分ね」

心配そうな顔のマリィに、スゥは素っ気無い返答をする。が、マリィはスゥの言葉など、聞いてはいなかった。

「大変！ 何かあったのかしら、急がなきゃ」

言うなり、声がした方向へと急ぐ。

「やれやれ、お早い再会だこと」

スゥは、けだるげに呟きながらも、マリィの後に続いた。

そして、更に急ぎ足で歩くこと、暫し。二人はある光景を目にして、足を止めた。

それは、一際大きな大木に、植物の蔓に絡めとめられて縛られている、若い女性の姿であった。

「……あ……れ？」

女性も、木々の隙間から突如現れた二人の姿に、驚いたようである。

「お二人とも、どうしてこんなところへ……？」

縛られてる人間が、そんな呑気なことを言ってる場合か、とは、スゥが思ったことである。マリィは素直に、

「やっぱり心配になって、来てみたの」

と答えて、女性に駆け寄る。そして、

「皆、大丈夫よ。この人は私の知り合いなの。離してあげて」

と、女性を縛る蔓に手をそっと添えて、語りかけた。

途端、蔓はゆるやかに女性から離れてゆく。女性は木の根元に、開放された。

「大丈夫？」

マリィが女性に手を差し出した。それも取らず、呆然としたまま、女性が呟く。

「植物が、勝手に……？」

「マリィは植物と話が出来るのよ」

解説を加えたのは、二人から少し下がっているスゥである。

「ちなみにさっきの蔓は、罨」

「罨？」

「そう罨。森に入ってくる、妖しい人物を捕らえる罨よ。例の、魔を退ける力を持つという、ギータカスで出来ているの。良かったわね、棘がなくて。さて」

さりげない口調を装って、スゥは言葉を続けた。

「魔術に反応する罨が、どうして貴方に反応したのかしら？」

女性がびくりとした。

「貴方が魔術で狙われているから……じゃ、ない。貴方自身、魔術を使っているからよね？」

「魔術じゃない！」

女性が強く反論した。が、スゥはそれを期待していたのである。

「そう、魔術じゃないわよね。魔術だったら、私もマリィも、さっき占い小屋で気付いた筈なもの。でも、そんな感じはなかった。魔術じゃない……じゃあ一体、何かしら？」

今の言葉の羅列は、スゥの誘導尋問だったのだ。それに見事にはまった女性は、言葉をなくした。

森の中に沈黙が広がった、そのときのことである。

「勝手に罨を解除してもらっては困るな、マリィ・アージュ」

スゥは腕を組んだ姿勢のまま、視線を左後ろに送った。声が聞こえた方向である。

そこには、一人の若い女が立っていた。小柄で丸顔で、スゥ達よりももっと若く、幼い感じさえする。体の小ささに不釣り合いな大きな眼鏡の奥の瞳には、しかし、鋭い光が宿っていた。

名前を呼ばれたマリィも、突然現れた彼女の方に顔を上げた。  
「ごめんなさい、ソネット。でも、この人は私の知り合いなのよ」  
「つい数時間前からのね」  
「スウちゃん！」  
余計な言葉を追加したスウに、マリィの叱咤の声が飛んだ。スウは勿論、知らん顔である。  
「……いずれにせよ」  
割って入ったのは、ソネットと呼ばれた女だった。  
「解除されてしまった罫を、もう一度発動させることは出来ないからな。それはまあ、神官殿に免じて大目に見よう」  
「ソネット、ありがとう」  
マリィは顔を明るくしたが、ソネットは表情も変えずに続けた。  
「だが、不用意に私の居住区に入りこまれるのは、不愉快だ。早々に立ち去ってもらいたいな」  
「でも、彼女、森の中に用があるようなの。通してあげてもらえないかしら？」  
「出来ない相談だ」  
マリィが頼んでも、ソネットの返答は素っ気無い。  
「どういう事情があるうとも、罫が反応したような人間など、私の居住区内を通すわけにはいかない」  
「ところで、ソネット」  
不意に、スウが口を挟んだ。  
「貴方の罫に反応するのは、どういう人？」  
「このギータカスの罫で、か？ それなら、まずは、魔術を使う人間。それに、魔術をかけられている人間だな」  
「それから？」  
「それから……そうだな、神官殿のような、何かしら異能を持つもの」  
「マリィにも反応するの？」  
「いや、神官殿には、反応しない。神官殿の顔は、ギータカスが覚えてしまっているようだからな」  
「じゃあ、彼女に反応したのは？」  
いきなり話題の中心に据えられた女性は、マリィの影から、恐る恐る顔を上げた。  
「この人間も、何らかの異能を持つのだろうか」  
ソネットが、女性の顔を無表情に見ながら、淡々と言った。  
「そうでなければ、ギータカスではなくて、カラリオの罫の方が反応している筈だ」  
「では、彼女はどのような異能を持っているの？」  
「そんなことは、私の知ったことではない」  
一瞬ソネットは、怪訝そうな顔をした。彼女が表情を変えたのは、登場後初めてのことである。が、直ぐに表情を戻した。  
「……知りたいのか、それが？」  
「そう」  
スウはにっこりと笑った。  
「では、これを使えばよい」  
ソネットが、肩に下げた袋から、小さな人形を取り出した。それを地面に置く。  
すると、人形がむくりとひとりで置き上がり、ふらふらとしながらも、歩き始めた。驚いているのは、まだ座りこんだままの女性一人だが、人形はその彼女に向かっていった。  
ゆっくりとした歩みで、漸く人形は、女性の前に辿りつく。女性が人形に気を取られている間に、スウがさりげなくマリィの手を引いて女性から離れさせたのにも、気付いていない。人形が顔を上げると、丁度女性と向き合う格好になった。  
「これは、ハイサを中心に調合したものだ。人間の活動を押さえる作用がある。何らかの異能を使っていたとしても、それが使えなくなるだろう」  
ソネットが言い、女性がはっとした顔をするのと、人形が弾けて白煙が上がるのとは、同時であった。女性は声を上げる暇もなく、白煙に包み込まれた。

「ソイエさん！」

驚いたマリィが駆け寄ろうとするのを、スゥが押し留める。

「大丈夫よ、怪我したりはしないわ」

そう会話している間に、白煙は高く空へと上っていく。薄れていく白煙の中に、ぼんやりと人影が見え始めた。その人物は、激しく咳き込んでいるようだ。その様子に気付いたマリィが

「スゥちゃん、本当に大丈夫なの？」

と、眉を顰めてスゥに尋ねたが、スゥは「大丈夫だってば」と取り合わない。

次第に白煙は風に流される。そして人影は、三人の前に、その姿を露にした。

そこで咳き込んでいるのは、一人の男性であった。

その男性は、すらりとした長身の持ち主で、目鼻立ちもはっきりとして整った、かなりの男前であった。一度見れば強く印象に残る、そういう人物だ。

ただ、おかしなことといえば、その男性は、ひらひらとしたスカートという、明らかに女性の服を着ていたことである。そう、先程まで、ソイエと名乗った女性が身につけていた服であった。

「……ソイエさん……？」

マリィが呟いたが、それっきり固まって動けなくなっている。目の前で何が起きているのか、理解しかねているのだ。

マリィだけではなく、スゥもソネットも、一様に驚いている。ただ、マリィのように表現していないだけであった。

そうして、暫しの沈黙が流れた。

漸く白煙も完全に消え、現れた男性の咳も収まった頃、スゥが一つ溜息を吐いてから、口を開いた。

「……まさか女装男だったとはね」

「女装じゃない、『変身』だ！！」

男が反射的に言い返す。

「『変身』～？」

スゥが疑わしげに言うのにかぶさって、ソネットが呟いた。

「……なるほど、『変身』か。珍しいものを見せてもらった」

「ソネット？」

スゥが彼女の方を見る。

「『変身』は、きわめて数の少ない異能だ。一族の中に稀に現れることがある、と、話しにだけは聞いたことがあったが、実物を見ることが出来るとはな」

一人得心しているソネットに、スゥは軽く首を傾げて見せた。それに気付いたソネットは、言葉を続ける。

「現マーシャル公妃の一族に、そういう能力を持つ者が、たまに現れるそうさ」

それを聞いてから一瞬の間を置いて、スゥが大きな声を出した。

「あーっ！！ そうだわ、どこかで見たような顔だと思ったら、『公子様』の肖像画とそっくりなんだわ！」

「描いた画家が余程のへたくそでなければ、当然そうだろうな。肖像画とは、本人に似せて描くものだ」

ソネットが、淡々と言った。その声の調子に反して、その言葉は、重大なことを示唆していた。

「って、ことは、これが『公子様』なの？！」

そうして指を差された男の方は、ばつが悪そうに、顔を背けた。

「これが、公子様……」

何処から見ても不敬な言葉を、スゥは繰り返し呟いた。一同の間に、奇妙な沈黙が流れる。

と、スゥはふと、マリィが言葉もなく呆然と立ち尽くしたままであることを、思い出した。顔を向けると、先刻と少しも違わぬ状態で、マリィはそこに存在していた。

「……大丈夫、マリィ？」

スゥが話しかけると、マリィは反応した。返事を返したのではない。スゥの声を契機に、体をぐらつかせて、そのまま倒れたのである。

「マリィ！！」

「マリィさん！！」

スゥと男が、同時に叫んだ。マリィの体を支えたのは、近くに居たスゥである。男は、叫ぶと同時に立ち上がろうとしたのだが、スゥにきっと睨み付けられて、動けなくなってしまったのだ。

マリィは、どうやら気を失っているようであった。

「……ショックのあまり、気を失うなんて、まるで歌劇のヒロインのようね」

スゥが言った。言下に、男に対して「お前がショックを与えたのが悪い」と責めているらしい。

しかし、男が責任を感じる必要はなかった。

「ならばいいが、多分、違うだろう。神官殿は、ハイサの粉の影響を受けたのだ」

と、ソネットが言ったのである。

「少し効果範囲が広過ぎるようだな。うむ、まだ薬草の配分を調整する必要があるようだ」

などと、香気に考察しているソネットを、スゥはじっと見つめた。非難の視線である。

「問題ない、少し休ませれば、直ぐに回復する。神官殿は、少々ハイサの粉を浴びただけだからな」

言い訳するように付け加えたソネットだったが、スゥの視線は動かない。ソネットは苦笑しながら、更に言った。

「分かった。ここからなら、家が一番近いと言いたいのだろう？ 来るといい」

そして、肩に下げた袋から、今度は四足の動物の人形と小さな瓶とを取り出した。スゥ達に近付いて彼女達の目の前に人形を置き、小瓶の中身を振りかけると、見る間に人形は大きくなる。あっという間に、人間並みの大きさになった。

「神官殿は、これに運ばせよう」

スゥとソネットは二人がかりで、マリィの体を人形に乗せた。ソネットが人形の首を二、三度撫でると、人形はゆっくりと動き出した。

「……相変わらず、変なものばかり作ってるわねえ」

人形に合わせて歩き始めたスゥが言ったが、ソネットは聞き流した。

そのまま、ソネットも歩き始めようとしたとき、ふと振り返った。先程スゥに睨み付けられてからというもの、成すすべなく彼女達を見ていた、男の方を、である。

「公子も来られよ」

「……えっ……？」

「何処へ行かれるつもりだったのかは知らないが、その格好では、行けまい？」

男は自分の着ている服をつらつらと眺めた。確かに、堂々と街を歩けるような格好とは思えなかった。

「朝までそこで居たければ、それでもいいが」

と、ソネットは、男の返答を待つことなく、前を向いて歩き始めた。

そのため、男は慌てて立ち上がり、ソネット達の跡について行ったのであった。

一行が森を進むと、それ程歩く間もなく、一軒の小屋が見えてきた。真っ直ぐ突き進めば、あっというまに辿りつきそうであったが、一行は、蛇行しながら小屋へと近付いて行く。ソネットが張り巡らせている罟を回避するためだった。

思うよりも時間をかけて漸く辿りついたそこは、作り自体は質素な小屋であった。ただ、やたらと周辺に人形やぬいぐるみの類が並んでいるので、独特の空間を形成している。

小屋の中に一步入ると、人形の数は更に増えた。両壁の棚には、窮屈そうにびっしりと人形達は並んでいた。男は遠慮がちに辺りを見まわし、それから、言った。

「……もしかして、ソネットさんというのは、あの有名な人形師のソネット・サーヴァ殿ですか？」

「今頃気が付いたか」

ソネットは素っ気無く言った。男の方を振り返ることもなく、棚から何やら取り出している。

「しかし、巷の噂はともかく、母から聞いた話からすると、まさか、こんなにお若い方とは思ってもよらず……」

「私は二代目だからな」

「二代目？」

「あら、ソネットが素直に自分の話をするなんて、珍しいのね」

マリィを椅子に腰掛けさせようと苦心しているスゥが、それでも、口を挟んだ。

「公妃とは、先代からの付き合いだ。その子息とあらば、嘘をついたとて無意味だろう」

ソネットはさらりと返す。それから、ぱっと顔を上げて、大きな声を出した。

「サラサ、湯を持ってきなさい」

「サラサ？ 新しい人形？」

スゥが聞くと、ソネットが答える前に、奥の扉が開いた。

現れたのは、一人の少女である。大きな漆黒の瞳が印象的な、愛らしい少女であった。黒い長い髪は緩やかに結われて、足元にまで流れている。

少女は、両手でやかんを下げていた。それをしっかりと持ったまま、スゥと男の視線を避けるように、小走りでソネットの元へと移動する。

「早いな。湯を沸かすくらいは、魔力を使わなくてもよいぞ」

少女からやかんを受け取ったソネットが、少女の頭を撫でながら、言った。少女は小さく頷きつつ、ソネットの背中に隠れた。

どうやら、スゥ達見知らぬ人間を、避けているようである。スゥは尋ねた。

「……なあに、その子？」

「森で拾った」

「拾った……って」

余りに簡単なソネットの回答に、スゥが当然質問を続けようとしたが、ソネットはそれをかわした。

「サラサのことより、今は、神官殿だろう。せめて、目を覚ましてもらいたいものだが」

「起こして大丈夫なの？」

話題の変更に応じたスゥが確認すると、ソネットは頷いた。

そのため、スゥは、マリィを目覚めさせるべく、椅子に腰掛けさせた彼女の肩を揺り動かした。

その試みが成功し、マリィはゆっくりと目を開いた。

「スゥちゃん……？」

「大丈夫、マリィ？」

スゥがマリィの顔を覗き込む。マリィは二、三度、ゆっくりと瞬きした。

「うん……なんだか、体がだるいけど……」

「ハイサの粉の影響で、一時的に生命力を消耗した状態なのだ」

ソネットが、説明しながら、二人に近付いた。手には、湯のみが一つ。湯のみの中には、透明な湯の上に、一枚の緑の葉が浮いていた。

「これを飲むといい。回復が早くなる」

「ありがとう、ソネット」

マリィは、開ききらない目をしばたかせつつ、律儀に礼を言って、湯のみを受け取った。両手でそれを持ち、ゆっくりと湯をすすする。けして美味しいものではないらしく、飲み進むペー

スはゆっくりだが、マリィは着実に湯を胃に注ぎ込んで行った。

そして、何時の間にか二人の側から離れていたソネットが、今度は、ぼけっと彼女等の様子を眺めていた男の方へと、移動した。手には先程と同じく、湯のみが一つ。

「公子も飲みなさい」

ソネットは、有無を言わず、湯のみを男の手に押し付けた。

「さあ、早く」

躊躇っている男に、ソネットは強く促した。彼女の後ろでは、マリィが同じものをゆっくりと飲んでいるにも関わらず。男はやや理不尽なものを感じたが、それでも逆らわず、湯のみの中身を一気に飲み干した。

男から空になった湯のみを受け取ると、ソネットが再び口を開く。

「隣の部屋で、服を着替えるとよかろう」

「着替え……たたくても、服を持ち合わせていないのですが……」

おどおどと男が言う。ソネットは、男に背を向けつつ、応じた。

「着替えはこちらで用意しておく。実験着位しかないが、それでも、その格好よりはましだろう」

そして、歩き出す。慌てて男も立ち上がり、彼女に続いて、隣の部屋へと移動した。

男が部屋に消えた頃、マリィは、湯のみの中身を全て飲み終えていた。その彼女の前に、黒髪の少女が、いつのまにやら立っている。

マリィと目が合うと、少女は、両手をゆっくりと差し出した。空になった湯のみを受け取るためであるらしい。

「ありがと、サラサちゃん」

湯のみを渡して空いた手で、マリィはサラサの頭を撫でた。サラサは頬を紅潮させて、きゅっと唇を引き締めた。どうやら、照れているらしい。

「マリィ、この子のことを知ってるの？」

「サラサちゃんのこと？ ええ、勿論。サラサちゃんは先週、うちの神殿で生まれたんだもの」

「……先週?!」

目の前の少女は、幼いと言っても、見る限り七、八歳位である。スゥが聞き間違えかと言葉を繰り返したのも、無理はない。そしてスゥの驚きに答えたのは、奥の部屋から戻ってきたソネットであった。

「サラサは魔物だ」

短い答えである。ソネットは、サラサがしっかりと持っていた湯のみを受け取り、片付けを始めた。

「魔物、ねえ……」

スゥが呟いた。ソネットの言葉に納得をしていないのである。ソネットは、それを承知しているらしく、作業の手を休めずに、説明を続けた。

「私が先週、森で拾ったのだ、魔物の種を」

「『魔物の種』？」

「種から成長する魔物、というのがいるのだ。本来なら、何物かに寄生して、そこから養分を得ながら成長する」

「養分……って、魔力？」

「魔力でも、いわゆる生命力などでも良い。大抵は、植物に寄生する。魔力を操る動物版ヤドリギ、といったところか」

「それが、人間の姿をしているものなの？」

要するにスゥの疑問の中心は、この点にあったらしい。

「普通は、そんな筈はないな。それ固有の姿をしている」

「じゃあ何故、この子は特別な？」

「私が拾ったその種は、ただの種ではなかった。誰か、魔術を操る人間の手によって、加工されたものだったのだ」

「加工……」

つまり、この少女は、何者かが意識して作り出した「魔物」だということだ。スゥの警戒を含む視線が、少女の頭からつま先までを、辿った。

サラサは、自分のことを話しているのが分かっているのか、ソネットの手をしっかりと握り、心細げにその顔を見上げている。

「人間の意思を最初に注ぎ込まれているのだ。だから、人の姿を形成しやすくなる。成長するにつれ、固有の姿へ近付いては行くだろうが」

「……それはまあ、いいわ。それより、誰かがわざわざ加工したってことは、何か目的があつてやったってことじゃないの？」

「勿論、そうだろうな。何の目的があつたかは分からんが、どうせ碌なことでもあるまい」

「そうでしょうね。危険なんじゃないの？ ……って、そうね、危険だからこそ……」

「そう。幸い、成長前に見つけたのでな。先手を打って、神殿に預けたのだ」

スゥは、ソネットからマリィの方へ視線を動かした。

「それで、おじい様を中心に私達神官が、種に清めの儀式を行ったの。そうしたら、生まれて現れたのが、サラサちゃんなのよ」

「……清められて、危険はなくなった、と？」

「まあ、私達のことを信用してないの？」

まだ用心をしているスゥに、マリィは腰に手を当てて、怒りの表現をして見せる。

「そういう訳じゃないけど……」

「無論、用心するに越したことはない。だから、私の側において、サラサの面倒を見ることにしたのだ」

「……………」

少しの間、スゥは口をつぐんだ。それから、ふうっと息を吐き出して、口を開く。

「……ま、いいわ。つまり、マリィがこの子の生みの親になって、ソネットが育ての親になるって、そういうことね」

だったら、この子のことも信用してあげましょう。と、スゥはそう続ける予定だったが、それは、がたんという大きな物音によって阻まれた。三人は一斉に顔を上げて、一方向を見る。その三組の瞳の先には、扉から出てきた、一人の男の姿があつた。

「……あ、どうも……」

視線を一身に浴びた男は、たじろいだ。スゥなど、あからさまに観察の視線を注ぎ込んでいるので、それも無理はない。

「着れないことはなかったようだな」

ソネットが、最初に彼から視線を外しつつ、そう言った。

「あ、はい。問題はないです。ありがとうございました」

ソネットは更に、椅子を一つ引き出した。ここに座れ、と、そういうことらしい。男は、示された椅子に向かって、ゆっくりと歩き始めた。

その拳動は、存外気品があり、この男が意外と二枚目であったことを知らしめていた。男が着ているのは、ソネットの使っている作り置きの実験着で、質素というよりもいっそ、みずばらしくさえあるような衣装である。だが、先程までの女性服の姿の時と違って、整った顔立ちを普通に一人の男として観賞できるようにするという点においては、十分に役立っていた。そうして、意地悪な判定基準を持っている筈のスゥをして、この男を二枚目と判断させるに至ったのだ。

そんなスゥの観察を余所に、男はマリィの前で一度足を止めた。

「マリィさん。その……大丈夫ですか？」

「え、ええ。大丈夫です。心配なさないで……下さい」

やりとりがお互いぎこちないのは、男の変貌ぶりに原因があるのだろうか。もしくは、スゥのきつい視線のせいであろうか。いずれにせよ、

「そう、ですか。それなら、よかった」

と、男は短く言って、移動を再開した。

そして、男は椅子に辿りつき、そこに腰掛けた。

「さて、落ち着かれたところで、公子」

と、早速ソネットが口を開いた。

「一体何処へ行き何をするつもりだったのか、聞かせて貰おうか」

「……………」

男は黙って俯いた。その態度は、説明する言葉を選んでいるというよりも、説明を拒否しようとして試みているようであったが、ソネットはお構いなしで、続けて言った。

「勝手に森をうろうろされては、迷惑だ。だが、何か納得できる理由さえあれば、邪魔をする気はない」

男は俯いたままである。ソネットは更に言う。

「話によっては、力になってやらんでもないぞ」

「……随分、親切な申し出ですこと」

口を挟んだのはスゥだった。横座りに机に片肘を付いて、ソネットを眺めている。

「マーシャル公妃には、色々世話になっているからな」

ソネットがさらっとそう答えたが、スゥには分かっていた。ソネットは、マーシャル公子すなわち未来のマーシャル公に、恩を売ることを考えているに違いない、と。それは同時に、このひ弱な男が間違いなく本当にマーシャル公子であるということを示している。ここに至ってもまだ疑いを捨てきれていなかったらしいスゥは、「ああ、そう」と気の抜けた返事をした。そして、

「で、公子様。さっき、占い小屋で私達に話したのは、事実なの？」

と、初めて男を「公子」と呼んで、話しかけた。但し、彼女の口から出た言葉に、敬意を表現するものは、ない。

「……………」

男はまだ黙っている。スゥの無礼な物言いに怒っている、ということではなかった。言うべき言葉を見つけられずにいるようである。

「もう今更、何を隠しても仕方ないんじゃないの？ 私がさっき聞いた話をソネットにすれば、ソネットからマーシャル公妃に、ひいてはマーシャル公にも話が届くでしょうね。そんなことになったら、却って不都合なんじゃないの？ 態々女装して外に出て来てるぐらいなんだから、お忍びでしょ？」

「女装じゃなくて、変身です」

今度は即座に、男が答えた。この部分は、どうしても譲れないらしい。

そして、一旦口を開いたことで、男は決心がついたようである。

「分かりました。お話します。……私は、ウィル・ヴィ・ミストクレア。現在、マーシャル公子という立場です。先程スゥさんとマリィさんにお話したことは、事実、私の周り……マーシャル公国の城で、起こっていることです」

と、話し始めた。

「スゥさんとマリィさんにとっては重複するかと思いますが、順に説明します。最近、誰も触れていないのに、ひとりで物が壊れることが続いて起こりました。決まって、私の側のものが、です。最初は偶然だと、気に留めてもいませんでした。が、余りに頻繁に起こるので、侍女達の中に気味悪く思う者まで出てきました。これは何かの『呪い』じゃないか、などと言い出す者まで現れる始末で……」

「当然の反応でしょうね」

服の袖を弄びながら、スゥが口を挟む。

「そうかもしれません。が、私がそれに同意することは絶対に出来ません。万が一、そういった類の現象だったとしても、私は否定し、平静を装っていなければなりません。皆の不安を煽るような行動だけは、絶対に避けねばならないのです」

「当然の判断ね」

ちらりと公子の方を見て、またスゥが口を挟んだ。

「いずれにせよ、確かに何か不穏な空気を感じてはいたものの、具体的に危機感を持っていた訳ではありませんでした。正直、軽く考えていたのです……今日、スゥさんに、『魔術をかけられている』と指摘されるまでは」

「なるほどね。やっぱり、マリィと会ったのは、正真正銘、偶然だった訳ね」

そう呟いてから、スゥは、ふと気付いて言った。

「って、ことは、貴方、何をしに女装して街をうろついていたの？」

「変、身、です」

強調を加えて、公子は返した。

「街へ忍んで出かけるのは、以前からの習慣です。市井の様子を知るのは、自ら歩くのに如くはない、と思っているものですから。勿論、そのまま出歩くことは不可能です。それで、持って生まれた能力を生かしている訳です」

「能力を生かす、ねえ。……顔を隠す目的だったら、別に女に変身する必要はないんじゃないの？ しかも美人になってれば、それはそれで目立つんじゃないの？」

「それはまあ、そうなのですが……」

スゥの指摘に対して口篋もった辺り、やはり変身した結果が美女である点については、当人の趣味の産物であるに違いない。そう判断したスゥは、意地悪な攻撃を仕掛けようとしたのだが、その前にマリィの声が割り込んだ。

「……女性の方が、警戒されにくいんじゃないかしら」

「場合にもよる、と思うけど」

マリィの、公子を庇っているかとも取れる意見に対し、スゥがぶっきらぼうに反対した。言葉がきつくなったのは、攻撃体勢になっていたのに空振りをしたので、勢い余っていたからである。

「でも、少なくとも、もし男の人だったら……今日、私もそう簡単に、スゥちゃんの所に誘ったりしなかったと思うし……」

スゥは黙ったまま、マリィから視線を逸らせた。攻撃個所だとは思ったものの、実際のところ、そんなことはどうだっていいことなのだ。

「公子様は、お母様もお姉様もお綺麗な方ばかりに囲まれていらっしゃるし……基準が美人だから、変身した姿も美人になってしまうんじゃないかしら？」

随分な肩入れしようであるが、ある意味、万人に親切であるべし、というマリィの行動理念には、叶っている。ようやく自分の調子を取り戻したのかもしれない。

「確かに、言われてみれば、さっきのソイエ嬢って、オーラ姫の面影があった気もするけどね」

などと、スゥがマリィに同意するようなことを言った。勿論、心から同意したなどということとは決してない。ただ、この話題を終了させようとしているのである。

だが、マリィはそれに気付いていないようだ。そして、もう一人、気付いていない人間がいた。公子である。

「……マリィさん……」

庇われたのがそんなに嬉しかったのか、公子は、マリィに微笑を送った。

「ところで」

と、独自の空間を作りかけている二人に割りこんだのは、ソネットだった。

「公子の周りで起こったその現象、それが魔術の結果だと、何故分かる？」

「占いで」

スゥが即答した。それから、ちょっと首を傾げて付け加える。

「……というだけじゃ、なかったのよね」

そして、先刻占い小屋で起こった出来事を、かいつまんで説明した。マリィの御守りが発動したことと、スゥの占いの結果とを、である。ちなみに、説明を公子に任せず自分でしたのは、その方が手っ取り早いと判断したからだ。

「……という訳で、間違いはないと思うわ」

「……魔術を掛けられている、か……」

スゥの説明を聞き終えたソネットが、呟いた。

「と、すると……事は意外と厄介だな」

「どういうことですか？」

公子がソネットに尋ねた。ので、ソネットは、公子の方に顔を向けて、答える。

「つまりだな、公子。今までは、城の中で『公子』が狙われていた。だが、スゥの小屋での一件に関して言えば、『公子』と大よそ無関係な場所で、尚且つ姿形も『公子』に程遠かったにも関わらず、同じように狙われたということだ」

「それは……私に魔術を掛けられている『相手』は、私の変身能力を知っている、ということですね？」

公子が、眉を寄せつつ言った。

「つまり……」

「相手は、公子のごく身近な人物である可能性が高い」

公子が口にするのを憚った言葉を、ソネットは容赦なく声にした。公子は黙り込んでいる。

「……側近の者達を疑いたくない気持ちは分かるが、事実をしかと受け取らねば、問題には対処できなくなる」

「疑いたくない、ではなくて……」

ソネットの言に、公子は、口を重く動かした。

「……『疑えない』のです。私の能力は、堅く秘密として守っているのです。それを知るのは……現在国境警備に当たっている、トキ・リィ・ゲイン將軍、ただ一人だけです」

「あの男だけだと？」

ソネットが何故かここで、失笑した。

ゲイン將軍と言え、まだ若いながらも幾多の戦功輝かしく、巷では奇才と呼ばれている人物である。現マーシャル公の覚えもめでたく、公子が幼少の頃は、教育役として公子に教鞭をとったこともある筈だった。

公子とは師弟関係になる訳で、公子の能力を彼が知っている、というのは、合点の行かぬ話ではない。この場合、ソネットの反応の方が、スゥ達の理解を超えたものであった。

「なあに、ソネット。まさか貴方、ゲイン將軍と知り合いなの？」

「知り合い？ 冗談じゃない、あんな頭の堅い男、関わりなどない」

吐き捨てるように、ソネットが言った。

「やっぱり知ってるんじゃないの」

と、スゥは呆れ顔で応じる。随分嫌ってるみたいだけど、とは付け加えず、スゥは話を本筋に戻した。

「ゲイン將軍を疑えない理由は、何？」

スゥが公子に向かって尋ねる。と、公子は今度は、即答した。

「意味がないのです」

「逆ならまだしも」

そして割り込んで来たのは、ソネットである。

「そう、もし公子が、堅物で先生面するあの男を疎んじて、排除しようとするのなら、ありえんことではないがな。そういう身の危険があればこそ、反逆もしようものだが、今の状態は奴にとって、そう不都合があるとは考えにくい。公子の暗殺など、危険のみ多くして実少なし、だ」

何時の間にか事件は「公子暗殺」という大事になっている。だが、冷静に考えて見れば、公

子に細かく嫌がらせをしてどうなるものでなし、当然相手の目的は公子を傷つけることだと考える方が自然といえた。公子の口が重くなるのも、無理はなかった。

スゥは、きっと唇を結び思案に沈んでいる様子公子を、眺めやった。頼りないようできて、それなりに頭は働いているらしい。などと、見直してはいるものの至極失礼な感想を、彼女は持った。

そんな評価を受けているとは露知らず、公子が静かに口を開く。

「それに……そもそも彼は、これから頼ろうとした相手でもあります」

「さっき言った、『頼るあて』って、こと？」

ソネットが、ふん、と鼻で笑うのを無視して、スゥが言った。

「そうです。……隣国、エネーティ公国は魔術に関する研究が盛んです。そのエネーティ公国との国境の警備を任されている彼は、軍の中では唯一、魔術について知識を持つ人間ですから。そして何より……」

一旦息を吐いてから、公子は続ける。

「……私にしてみれば、口うるさい相手ですが、その分、信用のできる相手です。その彼を疑うことは、出来ません」

「……それならそれで、いいけど」

スゥは頭を掻いた。

「でもそれじゃ、誰一人として疑えなきゃ、何の手掛りもなくなっちゃうじゃないの」

一同の間に、沈黙が流れた。

ソネットの背に隠れて、人形で遊んでいたサラサが、雰囲気の変化を察して、不思議そうに上を見上げた。そのとき、サラサの視線の先のソネットが、思い出したように沈黙を破った。

「……占えばいい、スゥ」

「占いい？」

指名を受けたスゥは、眉間に皺を寄せる。

「簡単に言うけどね、ソネット……」

「情報が少なすぎる、と言いたいのだろうか？ 別に、犯人を特定しろとは言っていない。公子がこれから取るべき行動の指針を与えろ、と言っているんだ。それなら、出来るだろう？」

「指針、ねえ……そりゃあ、目の前の人物の問題として限定すれば、占うのは可能だけど……」

」

スゥは暫し思案した。それから、大げさに息を吐き出して、ずっと占い札を取り出す。

「……可能だわね。分かったわよ。やれることは、やってあげましょ」

そう宣言すると、スゥは手際良く札を繰り始めた。

「一つ聞いてもいいかしら？」

札を繰る手を止めず、スゥが公子に向かって質問を投げかけた。

「貴方の変身能力を知っているのは、ゲイン將軍の他には、どれだけいるの？」

公子は答えに戸惑った。それを見て取って、スゥが付け加える。

「誰を疑おうっていう意味じゃないから、正確に言って」

「あ、はい。そうですね……父と母、それに姉……あ、義兄も知っていますね」

「義兄……っていうと……」

「エース・ワンター尚書。宰相閣下の息子だよ。公国きっての色男と呼ばれた男と、美貌名高い姫君のと婚姻、大騒ぎをされたら？ 一昔前の話になるが、な」

説明を加えたのは、ソネットである。マーシャル公の一族について何かと詳しいのは、マーシャル公妃との繋がりのお賜物であろうか。

「あー……そういえば、そんなことも、あったわねえ……」

「なかなかご立派な方だったじゃない。忘れちゃったの、スゥちゃんってば？」

久しぶりにマリィが喋った。スゥが、顔を上げて、マリィを見る。

「ああ、そうか。その結婚式も、神殿でやったんだったわね。大騒ぎだったから、手伝いをしたんだったわ……でも私は、式自体は全然見てないのよ。裏方の手伝いばかりだったから」

「そうだったかしら？……いえ、確か、私が見てみないって誘ったら、『興味ない』って言って来なかったのよ」

マリィがくすくすと笑う。もう5、6年は前のことである。当時のことを思い出し、思い出話のように感じたようだ。

それに同調した訳ではなかったが、スゥはマリィと話し続けた。

「ねえ、マリィ。貴方は、ワンター様のこと、どう思った？」

「え？ どうって……そうねえ。やっぱり、凄く素敵だったわよ。お顔立ちは、まるで描いたみたいに、綺麗に整ってて、物腰も柔らかくて……」

「それだけ？ 文句なし？」

「えーっと……そりゃあ、敢えて言うなら、ちょっと、遊び慣れてるって感じが、気持ち悪かったけど……でも、オーラ姫に失礼になるようなことは、なさってない筈よ」

「そう、なるほどね。ありがとう」

ここで話を打ち切ったが、なんとも言えない微妙な苦笑を浮かべている公子と、スゥの目が合った。

「……何？」

「え、あ、いえ……どうしてそのようなことを、お聞きになっているのか、と」

「深い意味はないわ。情報を増やただけよ」

スゥが素っ気無く言い放つと、公子は「そうですか」と口をもごもごさせて、俯いた。

その様子に気付くところがあって、スゥは、

「公子は、ワンター様とは、親しく接してるの？」

と、尋ねた。尋ねられた公子は、あからさまに慌てる。

「え？ え、あ、えーと……いえ、まあ、それなりに……」

スゥはこの反応から、二人は決して仲良くしているのではない、ということを感じた。姉の夫が浮名を流していた男であれば、弟として心配するところがあるのは、自然であろう。とは

いえ、そこまで嫌っていたりする様子がない辺り、端から余り接点を持っていないのかもしれない。スゥは、そう考えた。

更に、ソネットは最初の説明以降、口を挟んでこない。ということは、ワンター尚書という人物は、公族の中でそれ程重要な位置を占めていないのを意味している。

「……っと。話が逸れたわね。で、それで全部？」

と、スゥは強引に話を戻した。ちょっとした興味から聞いてみたものの、もう公子の義兄についての情報はこれで十分、と判断したのだった。

「はい。後は……そう、ソネットさんのように、母の一族の力の存在を知る人は、いるかもしれませんが」

「それも、恐らくは私だけだろうよ」

自分の名前が話題に上ったソネットは、眠そうに目をこすっているサラサの頭を撫でながら、言った。

「公妃は、一族に稀に変身能力を持つ者が現れるということ、話には聞いていたものの、真実だとは思っていなかったらしい。たまたま異能の話題が出たときに、公妃が先代に『変身能力というのは在りうるものなのか』と尋ねられたので、その話の流れで、公妃の一族が持つという能力について、話が及んだように記憶している。……今思えば……公妃は、公子が変身能力を持っていることにうすうす気付き、在りうるか先代に確認したのではないかな？」

「そうかも……しれませんね。ずっと根拠のない伝承だと思っていたと、母の口から伺ったことがあります」

「とすれば、公妃がこの話を口にする機会は、まずないと考えていいと思う。何しろ先代も、『あったとしても、だからどうということはない』と、公妃に言ってのけていたのだからな。

公妃も笑って、同意していた」

「……どうということはない、ですか……まあ、そうですが……」

自分の能力の価値を否定された公子は、苦笑いしている。しかも、

「じゃ、まあ、そういうことで」

と、この頃には机の上に占い札を並べ終わっていたスゥは、何ら彼に対して慰めるでもなく、話を終わらせてしまった。

とはいえ、当人もそれ程役に立つものと思っている訳ではなさそうで、特に哀しんだりも怒ったりもしていない様子である。それより、気持ちはスゥの占いに移っているらしく、背筋を伸ばして椅子に座り直し、真っ直ぐ顔をスゥに向けた。

「……始めましょうか……最初に断っておくけど」

スゥは顔を上げて、公子の目を見返し、言った。

「分からないことが多いから、貴方自身についてしか、占わないからね」

「はい」

「じゃ、行くわよ」

スゥは3枚の占い札を、表に返した。

「……先程と、違うやり方なんです」

公子が呟くと、スゥは手を止めて、強く彼を睨み付けた。

「その時々にはふさわしいやり方っていうのがあるのよ。いいから、私が何か尋ねるまで、黙ってて」

厳しい言われように、公子が小さくなってしまふ。彼は「す、すみません」と口にするのが精一杯だった。

公子が黙ったので、スゥは占い札に神経を集中させた。表になった札をじっと見つめて、なにやら考え込んでいる風であった。

マリィは知っていることだが、占いをしている、彼女が何か悩むような素振りをするのではない。もしも判断に困っていることがあっても、それを出さないのが、占い師としてのスゥのやり方である。

通常と違う彼女の様子に、マリィが心配げな視線を送っていると、スゥは不意に、顔を上げた。

「公子様、貴方、これまでもしょっちゅう女装してたの？」

「女装はしてません」

しつこいようだが、公子にしてみれば、ここは否定せずには居られないらしい。

「変身するときは、大抵女性に変身してはいますが……」

「してるのね。じゃあ、その状態で、男性との恋愛の経験は？」

「……は？」

スゥの質問は、公子の予想の範囲を越えたもので、彼は何を尋ねられているのか、理解できなかったようだ。従って、彼は答えることが出来なかった訳だが、それをスゥは、

「ごめんなさい、つまらないことを聞いたわ。……じゃあ」

と、自分の質問が悪かったためと判断し、質問事項を変えた。

「貴方は当然気がないとして、それでも男にしつこく言い寄られた、とかいうことは？」

「い……言い寄られた、ですか？」

しかしこの質問も、公子にとって突飛なものだったようで、戸惑いを隠しきれない様子であった。スゥは、質問を補足した。

「そうね……あれだけの容姿だったら、街を歩いてて、声を掛けられることも多いんじゃないの？」

「そ、そういうもの、でしょうか……」

公子の反応が鈍いので、スゥは更に言った。

「貴方だって、びっくりするような美人が歩いてたら、目を奪われるでしょう？」

「それは、そうですね……あ、いえ」

と、スゥの言葉に同意しておきながら、慌てて手を振る。その公子の視線の先には、マリィが居る。

「でも、それだけで心を動かす訳ではないでしょう。気安く女性に声をかけるなど、女性に対して失礼ですから。……あ、まあ、声をかけないことも、失礼になる場合も、あるのかもしれませんが……ああ、でも」

公子は一体何を弁解しているのか、自分で分からなくなっている。

「もういいわ、分かったから」

と、スゥは冷たく遮った。

「占いを続けるわよ」

公子は混乱した自分を嫌悪し沈んだが、スゥは構わず、自分の作業を続けた。

新たに4枚の札を、表にする。

「……良かったわね」

スゥが突然、言った。公子は当然、戸惑う。

「え……？」

「思いがけない幸運、協力者の存在……そして、事態の変化、良い兆し」

一枚ずつ札を指差しながら、説明をする。

「これらは現状を示しているの……明らかに、私達のことですよ。私達に出会えたことは、貴方にとって良かったことよ。まさに、棚からボタ餅」

「は、はあ……そうですね。ありがとうございます」

スウの矢継ぎ早の自画自賛に、公子は素直に領けなかった。実際に、彼はスウ達に助けられていることを、非常に感謝しているのではあるが。

「さて、問題はここからよ」

恩を売るような言い方をしているが、スウも別に感謝を強要するつもりだった訳ではない。公子を「助けてやっている」という気持ちがある彼女にとっては、この結果は余りに当然のものであったので、ついああいいう可愛げのない言い方をして流したのである。だから、公子の返事を気にせず、スウは占いを続けた。

スウはゆっくりと、確実に札をめくって行く。

「1枚目……内省」

言葉を切って、スウは、公子の顔をじっと見据えた。

「貴方、本当に、心当たりがないの？」

「今回の事に関して、ですよ？ これとっては、ないのです……自分の知らぬ間に悪意を向けられることは、まああること、ですし……」

「でもね、貴方は知っている筈……そう、それが何か、貴方は胸に手を当てて、良く考えてみる必要がある。そういうことね」

まるで公子が悪事を働いたかのような言い草である。公子は、俯いて考え込んだ。

スウはそのまま知らぬ顔で、右手を滑らせるように、隣の札の上へ移動させた。

「さて、2枚目……年長者、権威ある存在。では、公子様」

呼びかけられると、公子は顔を上げた。

「と、いう人は、貴方にとっては、誰？」

「年長で、権威ある存在、ですか？ 父上……もしくは……やはり、ゲイン将軍でしょうね」

「そう。……じゃあ、3枚目。最後の札よ」

言いながら、裏向きのままで残った最後の一枚を、表に返した。

「……周りの助力、他力本願」

「ほお、それはまた」

口を挟んだのは、ずっと大人しかったソネットである。黙っているのに痺れを切らせた訳でもあるまいが。

「公子は反省するだけでよいのか」

「これは寧ろ、自らは下手に動かない方がよい、と判断すべきよ。今回の場合、協力者を示す札が出ているしね」

酷い言い様に反論したのは、なんとスウである。但し、公子を庇う意思があった訳ではないので、

「そういう取り方も、出来ないことはないけれど」

と、余計なことも言った。

「じゃあ、ゲイン将軍に相談することは、いいことなのね？」

結果をまとめたのは、マリィであった。彼女の場合は、公子を庇う意思があるかもしれない。

「そうね。そうだと思うわ」

スウが出した結論に、公子は大きく頷いた。

「では、私は、ゲイン将軍に相談するとともに、もう一度、心当たりがないか、良く考えてみることにします」

「相談に行くにしても、明日に、だな」

ソネットが、壁際の大きな置時計を指差して、言った。

この置時計、時計の文字盤の下に一体の人形が飾られており、正午には、鐘が鳴るとともにそれが踊り出すという代物であるのだが、まだ買い手が決まっていなかったため、彼女の元に置きっぱなしなのであった。これだったら害がなさそうだし売れても良さそうだけど、とスゥなどは思ったものである。

それはこの際、どうでもよいことだ。

「もう、夜だ。相手が魔術を使う、というなら、夜に出歩くのは得策ではない」

「そうなのですか？」

「種類にもよるが、魔術は月の光を受けることでより強力になるものだと言う。相手がどこまで、公子の行動を把握しているかは知らんが、用心はした方がよい」

「って、今夜はどうするつもりなのよ、ソネット？」

占い札を片付けながら、スゥが聞いた。

「ここなら結界が張ってあるからな、まず手出しは出来ないだろう」

「泊まれってこと？」

「毛布位は、提供できるぞ。不都合はあるまい」

「し、しかし」

勝手に話が進んでいる。慌てた公子が口を出した。

「女性のお宅に泊まるなどということは……」

公子が皆まで言う前に、ソネットは、さも呆れたような口調で、言っただけのける。

「私に女を感じるのか？」

「……」

ここで言葉を詰まらせるのは、考えようによっては、至極失礼な反応である。が、ソネットを始めとして、スゥもマリィも咎めなかった。二人とも、違うことに気がいっていたからである。

「私達も？」

「その方が、明日の行動が早くてよいだろう」

「それは構わないけど、おじい様に連絡しないと……」

マリィが困惑の表情で、小首を傾げた。ソネットはひらひらと手を振って、言う。

「それなら心配ない。伝言鳥を送って差し上げよう」

それから、棚の方へと移動した。

棚の下の方に置かれた大きな人形の影に、サラサの姿が見える。長話に退屈したのか、人形に凭れかかるようにして、うとうととしている。

サラサを起こさないようにか、ソネットは背伸びをして、棚のものを取った。出てきたのは、白い羽根の、鳥の人形が、2体。

「神殿への連絡と……公子の方は、公妃へ連絡が出来ればよかろう？」

「え、あ、はい」

「文面は、私が適当に作るから、心配しなくてもよい」

「……却って心配になりそうだが」

一人暮しで、こういう手間の要らないスゥが、頬杖を付いて、呟いた。ソネットは、きれいに無視して、作業に取り掛かった。

それからのソネットは、急な客が3人もという状況にも関わらず、見事な手回しで、皆をもてなした。働いたのは本人ではなく、扶養魔物と奇妙な人形だったりするものの、夕食はおろか、湯浴みの準備、着替え、寝床に至るまで、いっばしの宿屋にも引けを取らぬ、世話焼きぶりである。それもこれも、1人と1魔物の蓄えにしては十分過ぎる物品の数々があるが故の所業であった。

それぞれ寝場所を与えられた公子とマリィは、早々に眠り込んでいる。森で浴びたソネットの薬の影響であろう。という訳で、夜更けに一人机に座っているのは、スゥである。スゥは、机に肘をついて、占い札を一枚かざし見ながら、ぼんやりとしていた。

「占いが荒くなったな」

突然話しかけてきたのは、ソネットである。サラサが眠るのを確認してから、移動してきたのだった。ソネットは、スゥの斜め前の椅子に、横向きで腰掛けた。

「さっきのは特別、よ。情報が少ないから、占い札の示す意味を最大限に尊重しただけのこと

」

スゥは、占い札から目を離さずに、言った。

「……で、気になることは、何なのだ？」

スゥの目だけがずっと動いて、ソネットの横顔を写す。

「あの場で言わずにいたことがあるだろう。それは、何だ？」

「……別に、大したことじゃないわ」

占い札を持った手を下ろし、スゥはずっと背筋を伸ばした。

「まあ、聞く気があるなら、話すわ。……ねえ、ソネット」

ソネットが、体を傾けて、机の方へと向いた。

「『不誠実な恋愛』、『軽はずみな行為』、そして『新しいものの誕生』。この3つの言葉から、貴方なら、どういう状況を想像する？」

「公子が遊びで女を抱いて、子を産ませた」

ソネットの返答は明確である。

「……でしょうね、やっぱり」

「そんな結果が出ていたのか？」

「あくまでも、象徴としての言葉は、ね。でも、どうも納得がいかないのよ」

スゥは占い札から、3枚の札を抜き出して、机の中央に並べた。先程、彼女が最初にめくった3枚の札であり、これらを前にして、彼女は考え込んでいたものだ。

「さっきの占いは、公子の変身能力を前提に占ったもの。当然、その能力が故の出来事を示してしかるべきところなの。それなのに、まるで、公子個人の悪行じゃない、それって」

「変身能力を使えば、別の人間を装って、女遊びすることも簡単じゃないか？」

「ああ、そうね。そういう能力の使い方をするなら、ね。でも」

言いながら、スゥが真中の札を、指差した。

「それって、『軽はずみな行為』と、ちょっと反する気がするのよね。十分に計画的で計算された行為じゃない、それは」

ソネットは黙ったままだ。反論がなかったので、スゥはそのまま、話し続けた。

「何より、あの公子様は、嘘をつくのが下手よ。そんな人間が、自分の能力を巧妙に使って悪事を働くなんて、そんな器用な真似は出来ないと思う。まして、私の目を誤魔化してしらばっくれるなんてことは、絶対に無理ね」

ソネットが、ふと微笑を零した。

「それがお前の、公子に対する評価か。良いのだから、悪いのだから」

「育ちが良すぎるのよ、あの人は。って、まあ、公子様なんだから、育ちが良くて当然でしょうけどね」

と、ここで、スゥは顔を上げて、ソネットをじっと見る。

「ソネットの評価だって、私の人物評と大差ないんじゃないの？ だからこそ、世話を焼いて恩を売っておこうと判断したんでしょ？」

「まあな。世話を焼かれることに恩を感じる人間でなかったならば、ああいう接し方をしなかったのは、確かだ」

まるで言い訳をするように饒舌に言うソネットの、口元が笑っている。彼女は、こういったやり取りを、好んでいるらしい。とはいえ、話の本題がずれているので、

「それにしても、では一体、これは何を意味しているんだ？」

と、スゥに結論を求めた。

「それが分からないから、考えてるんじゃない。最初に出た結果が明瞭じゃないから、以降も詳しく占えなかったのよ」

「……そうか」

「公子自身も知らないこと、もしくは忘れていた何かを、示しているのかもしれない。……いづれにせよ、情報が揃えば、自然と明らかになる筈よ。だから、この結果は、心に留めておくだけにしようと思ったの。必要だった今後の指針は、明らかだったしね」

「なるほど。分かった」

ソネットは、不意に立ち上がった。

「なら、明日に備えるでしょう。スゥ、お前も早く休め」

話は終わりであるらしい。ソネットは、そのまま歩き出した。但し、その方向は、奥の部屋へ続く扉ではなく、外への出入り口の扉の方であった。

「ちょっとソネット、何処へ行くのよ？」

呼びとめられたソネットが、立ち止まって振り返った。

「庭に出るだけだよ。明日は、いろいろと準備が必要だからな」

そう答えながら、口元を綻ばせる。

「……その顔は、何か企んでいる顔ね」

「企んでいる、などと、人聞きの悪いことを言うな。公子のため、引いてはマーシャル公国のためだ」

「へえ、そおなのお」

じゃあじゃあと言って出て行くソネットを、スゥは目を半分だけ開いて、見送った。

ばたん、と扉が閉まる音を聞いてから、スゥは、机に広げた占い札をまとめて、席を立った。そして、ソネットとは反対に奥の部屋へと続く扉を開けて、部屋を出たのだった。

翌朝、スゥが目覚めて、机のある部屋へと移動すると、そこには既に朝食の準備がされていた。座って食事をしていたのは、公子のみ。彼は、昨日のまま、ソネットの実験着を身に着けている。

スゥが公子に、取り敢えず朝の挨拶を済ませると、マリィが部屋に入ってきた。

「スゥちゃん、おはよう。御飯の仕度、できてるわよ」

腕まくりをして、エプロンを身に着けている。ということは、この机の上のものを用意したのは、彼女であるということだ。

「おはよ。……マリィ、元気になったの？」

「ええ、もう大丈夫よ。……だって、昨夜は片付けの手伝いもしないで、すぐ眠っちゃったもの、朝御飯の仕度位は、お手伝いしなくちゃ」

「……そう」

起きていたけれども手伝いなどしようとも思わなかったスゥは、知らぬ顔を決め込んで、椅子へと腰掛けた。人には向き不向きがあり、それぞれ役割というものがあるものだ、というのが、彼女の考えである。

「ソネットは？」

早速ポットからお茶を注ぎながら、スゥが尋ねた。

「ソネットは、準備があるからって言って、もう早くに食事を済ませて、外に出て行ったわ」

「準備、ねえ」

昨夜の続きをしている、ということであろう。熱心なものだ。

「私達の方の準備が出来たら、直ぐにでも出発するからって言ってたわ」

「……そう」

一番時間のかかりそうな人が、よくそんな指示を出せるものだわ、スゥは思ったが、口にはしない。この場に居ない人間のことを言っても、仕方がないからだ。

だからスゥは、黙って食事に専念することにした。

したのだったが。

ふと視界の中の公子の視線に、気を引かれた。自分が見られているのではない。彼の視線の先は、てきばきと給仕をこなしているマリィであった。

公子にしてみれば、この四面楚歌の状態（本来、スゥ達の一応の目的は彼を助けることである筈なのだが）の中、唯一優しく接してくれるのがマリィである。マリィになつくのも無理はない、とは、スゥも思っていたのだが。

「……心当たりは、見付かったの？」

スゥは、出し抜けに言った。今回の事件の原因として、思い当たることはないのか、という確認である。

何も今直ぐすることはない話である。だが、彼女は意地悪心を起こして、公子がマリィを見るのを邪魔したのであった。

「あ、え……と。それが……」

急に声を掛けられた公子は、慌ててスゥの方へと顔を向けた。

「やっぱり、どうしても、これといって思いつかないのです」

「……ま、それならそれで、仕方ないわね」

意地悪心が満たされたので、スゥはあっさりと会話を終了させた。そしてそのまま、食事に集中した。早く仕度を済ませて、出掛ける準備をしようとしていたのだった。

そんなに慌てるでもなく準備を済ませたスゥが小屋の外に出ると、マリィとサラサ、そして公子が既に居た。

外に居たのは、以上の3名である。つまり、ソネットが居ない。

やっぱり「急げ」と言った本人が一番遅かったわね、と思いつつ、スゥは、庭の木の根元に腰を下ろした。どうせもう暫くはソネットは来ないであろう、との判断の結果である。そして、周りを見渡した。

サラサが、マリィのスカートの裾をしっかりと握っている。離れようとする様子は、ない。この場にソネットが居ないことが不安なのだろうか。

マリィは、サラサの髪を撫でてやったり、微笑みかけてやったりしている。完全にサラサにかかりっきりであった。

必然的に、公子だけは暇そうに、ぼんやりと立ち尽くしていた。どうやらサラサは公子に對し、人見知りぶりを発揮しているため、公子は公子で気を使って、彼女に近付かぬようにし

ているようだった。

「ねえ」

腰を下ろして寛いでいるスゥは、公子に話しかけた。別にその必要はなかったが、ふと思いつくところがあったのである。

「はい、なんででしょう？」

「貴方、その格好で行くの？」

「え？ ああ、ここからは森の中だけですし、相手には能力を知れてるのだから、変身していても余り意味がないですから」

「ええ、そりゃあ、女装する必要はないと思うけど」

「女装じゃなくて……」

「そうじゃなくても」

お約束の言葉を公子が言う前に、スゥは話を続けた。

「ちょっとは、何か役に立つものに変身とか、出来ないの？」

「役に立つ……と言われてましても……」

「例えば、飛竜になって空を飛ぶとかは、できないの？」

言われた公子は、苦笑いをした。

「変身はあくまで『姿を変える』ものですから、その能力が身につく訳でもありません。例えばスゥさんに変身したとしても、占いが出来るようには、ならないんです」

「どうして私になるのよ？ ……ま、いいわ。やっぱり、女装専門な訳ね」

スゥが挑発的な言葉で締めて、話を終わらせようとしたが、公子は大人しく引き下がったりしなかった。

「女装ではありませんし、何にでも変わることは出来ます」

そう公子が言うが早いか、彼の体がぐにゃりとゆがんで見えた。そして崩れた輪郭は、見る間に違う物体の輪郭へと変貌する。

そうして現れたのは、銀色に輝く竜の姿であった。真紅の瞳がつややかに光り、スゥの顔を映し出している。そう、何処から見ても、立派な竜ではあったが。

「……その大きさは、わざと？」

スゥの目の前の竜は、人間の身長ほどの大きさで、また、ソネットの実験着、つまり公子が先程まで着ていた服を纏っている状態であった。とても、強そうには見えない。

「ですから、これは『己が姿を変える』能力でしかないのです。大きくなったり小さくなったりなんて、しないんです」

そういえば、昨日の女性の姿のときも、女性にしては身長が高かったことを、スゥは思い出した。

そして、「……本当に、役に立たない能力なのね」と思ったものの、口に出しては言わなかった。どんな道具でも重要なのは使い方であり、役に立つかどうかは使い方次第なのだ。こういう異能も、それは同じであろう。

彼女がそんなことを考えていると、小さく女性の悲鳴が聞こえた。

スゥ達の話し声にふと振り向いたマリィが上げた、驚きの声である。

「あ……済みません、驚かせてしまって」

慌てて公子が、元の姿に戻った。

「まあ、公子様。……色々な姿に変身出来るんですね」

悲鳴を上げてしまった恥ずかしさがあるのか、マリィが平静を装って、言った。

「いえ、それ程でも……」

照れるように、公子が返した。スゥは「誰も誉めてないわよ」と心の中で呟いたが、公子にすれば、漸くけなされずに済んだだけで、十分喜んでいたので。

そのとき、声が割り込んできた。

「何を遊んでいるんだ？」

ソネットの声であった。

「遊んでる訳じゃないわよ」

と返しつつ、上げたスゥの顔が、固まった。

スゥと同じように、声のする方へ向いたマリィと公子の顔も、同様に硬直する。

そこに居たのは、紛れも無くソネットである。だがしかし、彼女の姿は、昨日までとは打って変わったものであった。彼女は、全身見事な桃色の布に身を包んでいたのである。頭にはご丁寧に、丸い耳のようなものがついたフードまで、あった。どう見ても、着ぐるみのようなのだが。

「なんだ？」

当のソネットは、まるで何も気にする様子ではなかった。

「……なんだ、じゃないわよ。ソネット、その格好は……？」

「何か問題があるか？」

「問題って……ソネット、そんな着ぐるみを着て、出掛けるつもりなの？」

「着ぐるみ、などと言うな。これは、魔除けの服だ」

「魔除け……？」

「公子は、魔術を使う者に狙われているのだろうか？ 巻き添えを食うのは御免だからな、それなりに備えをしたまで」

言われた公子が、申し訳なさそうに俯いた。どうやら「自分が迷惑をかけている」のだと、認識させられているらしい。自ら進んで首を突っ込んでおいて「巻き添えを食う」も何もあったものではないと、スゥやソネット自身ならばそう思うところであるが。

「あ、そういえば、この色って」

不意にマリィが、ぽんと手を打った。ソネットは頷きを返す。

「そうだ。この布は、ギータカスの実を潰した汁で染めたものだ。これで基本的に、魔術は受け付けない」

「ふうん、なるほどね」

スゥが立ち上がって、裾を払いながら、言った。

「でも、態々その形にする必要はないんじゃないの？」

「この形は『必然』だ」

ソネットは、断言した。その根拠は、この場に居る誰にも理解されていなかったが、確信に満ちた口調だった。一同は、言葉を失っている。

「……ま、まあ、かわいいわよね、確かに」

マリィが、慰めるように、なんとかそう言うのが精一杯だった。

人形師であるソネットにとっては、普通の服を作ることは、プライドにかけて許されないことなのかもしれない。スゥはそう、勝手に納得した。

そんな皆の考えなど知らぬげのソネットは、

「では、行くぞ」

と、さっさと先頭を切って、森の中へと足を向けたのだった。

そのままソネットは、森の木々の隙間を器用にすり抜けて進んでいく。あの着ぐるみ服は、見かけの印象を裏切って、動きやすく出来ているらしい。何の苦もない様子で、さくさくと歩いていく。それを公子が追いかける格好で、一向は進んだ。マリィと、相変わらず彼女の裾を握ったままのサラサが、それに続き、そして最後が、スゥであった。

自分の身は守れる二人が先頭と最後尾を押さえ、魔法に対抗することを思えば最高の効力を発揮する御守を持っているマリィが、公子の側にいるという布陣である。誰が指示したものでないが、自然と最も効率の良い形になっていた。

「……ゲイン将軍を尋ねる、ということは」

ふと口を開いたのは、マリィである。

「森の砦に向かっているのよね？」

「そうだ。最短距離でな」

ソネットが答えた。

森の国境付近には、こじんまりとした砦がある。そこには、国境警備隊が駐屯している。現在ゲイン将軍は、国境警備に当たっている訳であるから、当然彼は、その砦に居る筈なのだ。

そして砦に行くには、通常ならば、整備された街道から派生する、石畳が敷かれて馬も通れるこれまた整備された道を通れば良いのである。けれどもソネットは、街道に迂回するよりも、真っ直ぐ目的地に向かって森を進むことを選択したのであった。

「……『不審人物』で、逮捕されなきゃいいけど」

スゥがぼそりと言う。

「公子がいるのにか？」

ソネットが返す。確かに、公子がいれば、公国内で無体を働かれる気遣いはない筈である。使えるものは何でも使う主義らしい。

と、そんな会話をしていた矢先のことである。

マリィが、足を止めた。

サラサが、マリィの裾を握ったまま、立ち止まったからだった。

マリィが振り返ると、サラサは、きっと眉を顰めて右方向を見つめている。

「どうしたの、サラサちゃん？」

マリィはしゃがんで、サラサの視点に合わせた。だが、サラサは視線を動かそうとしない。

二人の行動に気付いたソネット達も立ち止まったそのとき、一行横合い、すなわちサラサの視線の先に、人影が現れた。一人ではない、複数の屈強な兵士達であった。

「……………」

兵士達は無言のまま、あっというまに一行を取り囲んだ。不穏な空気が辺りを支配する。張り詰めた雰囲気の中、一人の兵士が、ゆっくりと口を動かした。

「……不審な一行を発見、捕獲する……」

抑揚のない、無機質な声。それを契機に、兵士達が一斉に動き出した。スゥ達が反応する暇もない。兵士はそれぞれに、スゥ達に手を伸ばした。

「ちょっと、何するのよ！！」

スゥは、取り敢えず抵抗を試みる。だが、訓練された兵士に彼女が力で敵う訳もない。あっという間に兵士に腕を掴まれた。

ソネットは、妙に落ち着いた様子で、抵抗の意思すらみせないで立っていた。逆に不気味な位の拳動であるが、兵士はその不自然さに気付いていないようで、こちらもあっさりと捕らえられる。そして、

「……きゃあ……！」

マリィは、伸ばされた手からサラサを庇おうとして、彼女を抱きかかえるように座りこんでしまった。当然、兵士の手はマリィへと伸びる。だがそれは、途中で跳ね返された。公子が、兵士の手を払ったのである。

「ひかえよ！ 私はマーシャル公国公子、ウィル・ヴィ・ミストクレアである。彼女達に手を触れることは、まかりならぬ！！」

公子が叱咤した。背筋を真っ直ぐに伸ばし、威厳に満ちたその行動は、彼が見せた初めての公子らしい面であった。

兵士達の動きが、ぴたりと止まった。まるで、その場で凍りついたかのように。

しかしそれは、ほんの一瞬のことであった。

兵士達は、壊れかけたぜんまい仕掛けの人形のようにぎこちなく俄かに、動きを再開した。

公子の言葉は、兵士を止められなかったのである。

「ちょ……っと、何なのよこれ！」

と、スゥが怒鳴るのと、

「ねえ、なんだか変だわ、この人達！！」

と、マリィが叫ぶのと、同時だった。

「操られているんだよ。分からないか？」

ソネットが、さらりと言う。

「操られて、いる……？」

わらわらと伸ばされる兵士達の手と格闘し続けている公子が、繰り返した。

意外なことに、公子は武術もたしなんでいるようで、兵士達に決して引けをとってはいない。だが、多勢に無勢、いつまでも持つとは思えなかった。

「……サラサ」

ソネットが名を呼ぶ。するとサラサは小さく頷いて、マリィの手をそっと解くと、三步、前へ出た。

「公子、下がられよ」

捕われているにも関わらず淡々と落ち着いたソネットのその言葉には、有無を言わさぬ強さがある。公子は一瞬戸惑ったような表情をしたが、直ぐに彼女の指示に従った。すぐ側の兵士の足を払うと同時に別の兵士のいる方へと転ばせることで、兵士達からの攻撃を逃れて、マリィ達の方へと下がる。

それと入れ違いになるように、サラサが更に一步、前に出た。

マリィの心配そうな瞳を始め、皆の視線を集める中、サラサの黒く長く輝く髪がさざめき始める。

それからは、一瞬の出来事だった。

サラサの瞳が、真紅に染まる。

背中から漆黒の翼が勢い良く広がり、ふわりと小さな体が浮く。

細く華奢な手を左右に広げる。

そして、眩い稲光が、彼女から放射状に散る。

「……うわあああああっ！！！」

サラサが放った電撃は、兵士達全員を余すことなく打ち据えたのだった。

あっという間のことで、誰もが呆然とする中、サラサは、すうっと地面に舞い降りたかと思うと、羽根を一度羽ばたかせた。

「……だ、大丈夫なの、皆さんは……？」

座りこんだまま、マリィが聞いた。

「大丈夫だろう、多分」

答えたのは、ソネットである。兵士から解放された彼女は、埃がついたと言わんばかりに、着ぐるみを払っている。

「多分、ってねえ……」

同じく解放されたスゥが、倒れた兵士を避けながら、皆の方に歩み寄った。

「サラサの電撃を受けた分は、問題ない。気は失っても、死にはしない」

「死ななければいいというものでも、ないと思うんですが……」

倒れた兵士達を困惑顔で眺めながら、公子が呟いたが、それは無視された。ソネットは言葉を超える。

「だが、次に目覚めたとき、暗示がちゃんと解けているかどうかは分からないからな。だから『多分』と言ったまで」

「そうねえ、でも、今日のはそんなに強くしてないからあ、解けちゃったんじゃないかなあ？」

甘えたような、舌足らずな声。それは、スゥでも、マリィでも、ソネットでも、勿論公子のものでもない。

残る一人のサラサも、先程からまだ皆に背を向けたまま、口元をきつと真一文字に結んでいる。

スゥ達が互いに顔を見合わせる。そして、サラサがまだ警戒体勢を続けているということに気付いて、彼女の視線の先へと、一斉に目を向けた。

そこには、森の薄闇の中にうっすらと、一つの人影があった。人影は、歩き出してこちらへと向かってきている。

「もぉ……神官なんかには捕まったりとかぁ、役に立たないのは別に全然構わなかったけどお。出来そこないの癖に、あたしの邪魔をするなんてねえ。なっまいきい〜」

途切れずに続く声は、明らかに、その人影の方から聞こえてきていた。

「ま、いいわ、雑魚さん達なんかは、どうでも。でも、この子は強いわよお。魔法もしっかり、かけてるしねえ」

ようやく木漏れ日の届く位置にまで来た人影が、その姿を陽光の下に晒した。

それは、なかなか体格の良い、長身の若い男であった。右手には大剣、鎧を着込んだ体を漆黒のマントで包んでいる。右肩にはマントの留め具が、妙に赤く鈍く、光を放っていた。

現れた人物を、公子が判別した。同時に、声を上げる。

「……トキ……！」

「……って……この人が、ゲイン將軍……？」

スゥが公子の方を見ると、公子の顔は、心なしか蒼ざめていた。

「そんな……ゲイン將軍も、操られてしまっているの……？」

マリィが、眉を顰めて呟いた。

「そのようだな」

ソネットは、目を細めて冷たく、現れた男を眺めている。

「うふ。覚悟なんか、しちゃってねえん！」

全員の反応に満足したように、声が高揚した調子で響いた。

と、その声に反射するごとく、サラサの両羽根が動く。

「！ サラサ、駄目だ！！」

サラサの行動に気付いたソネットが制止の声を飛ばしたが、遅かった。既にサラサの体は宙に浮かび、胸の前に鷲した両掌の間には光球が生み出されている。しかもその光球は、サラサが軽く左手を前に差し出すと同時に、男の方へと真っ直ぐに放たれていた。

光球は、みるみる大きさを増して、包み込まんとする勢いで男に迫る。それに対し、男は寧ろゆったりとした動作で、剣を抜いた。そして、剣を高く上げると、眼前に迫った巨大な光球に、無造作に振り下ろす。

光球は男の剣に触れた途端、一瞬で光を失った。そのまま剣で斬られるがままに、ガラス玉が割れるのと同じように、粉々に砕け散る。更に砕けた破片は、光球を放ったサラサの方、つまり全員が居る方向に向かって、飛散した。

「伏せろ！」

ソネットが叫ぶのに反応して、スゥもマリィも公子も、その場に身を伏せた。

破片は男の位置から斜め上方に向かって飛んだので、地面に屈んだ彼らの上を素通りした。只一人空中に居て高度を下げるのが間に合わなかったサラサも、ぎりぎり破片をかわす。が、直撃を受けることは避けたものの、体勢を崩し、そのまま地面に落下した。

「きゃははははっ！ 凄い、すごおい！！ さあっすが、『退魔の剣』ねっ！」

甲高く、勝ち誇った声が響く。

「……じゃ、まずは出来そこないから……」

声が喋っている間も、男はゆっくりと移動していた。移動先は、まだ起き上がれずにいるサラサの前であった。首を精一杯持ち上げ、きっと男を睨み付けるサラサを、男はうつろな目で見下ろす。男の右肩の赤い留め具が、ぬめりと光った。男は再び剣を高く掲げる。

「……死んじゃえ！」

剣は軽く振り下ろされた。サラサはぴくりとも動けずに居る。

そのとき、キン、と高い金属音が響いた。男の剣は、新たに割って入った一つの剣で、受け止められていた。

割って入ったのは、公子であった。地に伏せたとき、目の前に倒れている兵士の腰の剣に気付き、咄嗟にそれを拝借したのである。男がサラサへの攻撃にのみ集中していて、公子の行動に全く気を配ってなかったからこそ、為し得たことだった。

「……なあって、邪魔するのよおっ！！」

声がヒステリックに叫ぶ。木漏れ日の光が剣に反射して、男の赤い留め具を怪しく照らした。

「もうもうっ、ちゃんと順番があるのになっ！ あるのになっ！ あるのになっ！！」

男の剣に力が入るが、公子も一步も引かずに剣を支えている。

「公子、そのまま暫く持ち堪えろ」

公子に声を飛ばしたのは、ソネットである。果たしてその声が届いているのかどうか、公子には返答する余裕など無かった。

硬直状態に陥っているが、既に額に汗が滲んでいる公子に対して、男にはまだまだ余力がありそうである。この状況のままでは、長くは持たないであろう。

「神官殿、解呪を」

「え？」

更にソネットが、小声でマリィに指示を出した。いきなり言われて、マリィは戸惑いを隠せない。

「解呪の術を。奴を操っている魔力の元は、あの赤い留め具だ」

「え。……あ、分かったわ」

ソネットの指示の意味を飲み込んだマリィは、胸の前で手を組んで、ゆっくりと祈りの言葉を囁き始めた。

それを確認するより早く、ソネットが、今度はスゥに尋ねる。

「スゥ、コムアの実を持っているか？」

コムアは、汁気の多い実を付ける植物である。スゥは少し考えてから、答えた。

「え……と、清めの水用に精製した物なら、少しあるわよ」

「上出来だ。それを、ここに」

ソネットは、いつのまに着ぐるみから出したのか、素手の両手をスゥの方へと差し出した。その上には、小さな白い布製の人形が、いくつも乗っている。スゥは、懐から小さな瓶を取り出し、中の透明な液体を人形に注いだ。

彼女が何をするつもりかスゥには分からなかったが、この危機的状況を打開しようとしていることを信じて、彼女の言葉に従ったのである。相手は公子に気を取られているらしく、彼女達の行動に気付いている気配はなかった。

そしてソネットは、いきなりすっくと立ち上がった。

「公子、避ける！」

そう叫ぶと同時に、両手の人形を男に向かってぶちまける。水分を吸って重みを増している人形は、公子の頭上を越えた所で、放物線を描いて落下を始めた。しかも落下するだけではなく、人形はむくむくと大きく膨らみつつある。みるみる人の頭程の大きさになった。

「！ い……っやあああああーっ！」

男が上げた顔に、人形は容赦無く降り注ぎ、その体に取りついた。声が悲鳴を上げ、男の体が揺らぐ。

男に隙が出来た瞬間に、公子は慌てて身を引いたので、人形の攻撃からは無事逃れている。低い体勢でいたことが功を奏した。

「神官殿、今だ！」

言われたマリィが、祈りを続けたまま、男の方へと一步踏み出した。

「……。慈悲深き我等が神よ、邪悪なるものに捕われし哀れなるこの者を、御力でもて救い給え」

言い終わると、マリィは、組んでいた手を解き、男の右肩に向かって、すなわち赤い留め具に向かって、両手を差し広げた。

「……解呪！」

マリィの短い声と共に、彼女の両掌から、まぶしく光が放たれた。光は赤い留め具を強く照らす。

「い……いやあああああああっ！！！」

女の声の悲鳴が響く。が、それも長くは無かった。

留め具の赤色は、光にふき取られるように薄まり、光が消える頃には、完全に消えてなくなった。留め具は、透明な石の飾りへと変化した。

そして、男は、ゆっくりと地面に崩れ落ちた。

森の中に、静寂が広がる。

「素晴らしい。流石、神官殿だ」

服を直しながら、ソネットが言った。

「よ……よかった～、上手く行って。解呪なんて一人でやったことなかったから……」

マリィが屈託無く笑った。

「彼は、操られていたのが、解けた、ということ、ですか……？」

立ち上がった公子が、気遣わしげに聞いた。

「そうだ」

「あの赤い留め具に魔法が掛けられていて、それで他の人達よりも強力に、操られていたってこと、ね？」

「そうだ」

続いてスゥが聞く。ソネットの答えは、短い。

「それにしても、良く気付いたわねえ。留め具が魔力の元だって」

「簡単なことだ」

ソネットは、ゆっくりと倒れている男の側へと近付ていく。

「こいつは、赤が大嫌いなんだ。あんなに鮮やかな赤い物を身につけることなど、ありえない」

「そういえば、そうでしたね」

公子が、ぼんと手を打った。

ゲイン将軍とは最も付き合いが深そうな公子でさえ忘れていたような些細なことを、ソネットは何故知っているのか。スゥが疑惑を口にする。

「……どういう知り合いなんだか」

「他人だ」

ソネットはきっぱりと言ってのけた。

「……………あ、そう」

余程、嫌っているらしい。スゥは藪蛇を出すのを憚って、ソネットから視線を外した。マリィが、倒れていたサラサを起こしてやっている。公子は、剣を兵士の腰へと戻していた。

「……しかし、いつまで寝てるつもりだ」

ポツリと呟く声がした。ソネットである。スゥが彼女の方へと視線を戻すと、ソネットは、横たわる男を冷たく見下ろしている。

かと思うと、ソネットは俄かに男の方へと体を向けた。そして足を上げて、男の頭を思いきり蹴り飛ばしたではないか。

「ちょっ……と、ソネット?!」

余りに乱暴な行動に、スゥでさえ思わず咎める気になった。だが、ソネットは涼しい顔である。しかも、どうやら彼女の行動は、その目的を見事に果たしたようだ。

「う……、ん……？」

男は、意識を取り戻したらしい。

「痛っ……。なんだ、なんで頭が……？」

頭に手をやって庇いながら、男は上体を起こした。そこで、気付く。

「な、何だ？　ここは一体……」

「トキ、大丈夫か？」

公子が、男に駆け寄った。違うことをしていた彼は、ソネットの暴行を見ていなかったらしい。

「こ、公子?!」

声のした方へ顔を向けた男は、驚きの声を上げた。それから、くるりと辺りを見渡す。そして、自分の隣にいる人物を、知る。

「……ソネット・サーヴァ！　な、何故お前まで?!　しかも相変わらず、訳の分からん格好をして!」

「状況を説明してやろうか？　トキ・リィ・ゲイン」

ソネットは無表情に男を、トキ・リィ・ゲイン将軍を、見下ろしていた。

「魔術でもって狙われていることを知った公子が、魔術の知識もあり退魔の剣を持つ師を頼って尋ねてきたところ、まんまと敵の手に落ちたばかりか公子に襲い掛かってきた、それは頼りになる人間を、神殿の神官殿がその力で魔を退けて救って下さったのだ。分かったか？」

ソネットが、一気にまくし立てる。その言葉をゆっくりと理解した將軍は、ソネットを呆然と見上げた。

「な……なんだって？」

「え……と、つまり……」

ソネットの説明は間違っていないが、明らかに別の意図を持った言葉である。それではあんまりなのでか、公子が改めて、これまでの経緯を彼に説明した。

一通り説明を聞いたトキは、

「……つまり、公子は今、お命を狙われている、と？ しかも、魔術で？」

と、話の要約を呟いた。

「そのようだね」

公子がのんびりした口調で頷くと、それがトキが言葉を激しく発する契機となった。

「何を呑気におっしゃっておられるのですか！ それならそうと、何故早く私にお知らせ下さらなかったのです？！」

「え……いや、だから、そんな大層なことだとは、思ってなかったからだって。スゥさんに言われて気付いたときには、すぐトキに相談しようと考えたんだよ」

「それが問題だと言うんです！ そう重大だと考えておられなかったにしても、不審に感じられた段階で、私にご相談下されれば良いではありませんか！ 何も占い師ごときに」

「あー、……」

今の公子は地面に座った状態のままのトキに合わせて腰を下ろしている。そのため、こうして怒鳴られている様子は、教師が悪戯した子供を叱っている凶のようであり、そのような威厳はない、寧ろ滑稽さのある奇妙な光景であった。

そして、そんな二人を見下ろすように、一人の人間が割って入った。

「……占い師『ごとき』？」

公子は左側を、トキは右側を、見上げる。そこには、スゥが腕組みをして、すっと立っていた。

「失礼ですけど、ゲイン將軍、貴方、私の『占い』の何をご存知だと言うの？」

指名された当人は、突然の乱入に言葉がない。

「他の人はどうだか知らないけど、私が受け継いだ占いというのはね、得うる全ての情報を元に現在の状況を正確に分析し、その結果、最も起こりうる確立の高い未来を予測する技術よ。これって、誰でも多少なりとやっていることじゃなくて？」

言いながらスゥは、懐から紫の布に包まれた札を出し、トキに提示した。

「でもね、私にはこの占い札がある。参考にする情報としては、占う当人の話だけじゃなく世の中の流れや社会情勢に至るまで、ありとあらゆるものがあるけど、中でもこの占い札が、私にとっても多くの情報を与えてくれる。だけど、それだけでも駄目。そうして得られた玉石混交な情報を、的確に分析できて初めて、予測は成り立つのよ。そして私は、それが出来ている」

「……………」

「貴方が占いというものを一体どう考えていたかは知らないけれど、今の説明を聞いたら、それでもまだ私の仕事を『ごとき』呼ばわりする理由は、何処にもないでしょ。違うかしら？」

スゥにとって『占い師』は、三代受け継いできた大切な職業である。普段はそんな素振りはないが、家業を貶めるような発言に対しこうして食ってかかった所をみると、実際は自分の仕事に誇りを持っているのだ。

そんな彼女の心は、呆然としているトキにも、はっきりと伝わった。とはいえ、「そうですか、すみません」と素直に謝れる程、スゥの仕事についてトキが理解できる訳もない。彼は言葉を失ったまま、丸くなった目でスゥをただ見上げていた。

沈黙が暫し続いた後、

「……と、言うことで、話が脱線したけど」

と、沈黙を生んだ張本人であるスゥが、それを破る。そしてソネットが、スゥの言葉を受けた。

「そうだな、肝心の話をせねば、な。取り敢えず、今回の攻撃は撃退できたとはいえ、そのんびりもしてられまい」

「あの……あの声の主が、今回の一連の現象を引き起こしている人間、なのでしょうか？」

公子が、言いながら立ち上がった。

「元凶であることは確かだろうが、『人間』ではないだろうな」

答えるのは、ソネットである。

「……と、言いますと……？」

「魔物だ」

「……………」

公子が、口をつぐんだ。

スゥの占いによって、今回の敵は身近な人物であると指摘されているのに、魔物などという人外の者の登場に、混乱しているのがあった。自分の身近に魔物がいたとは、到底考えられることではない。

そんな公子の様子に全く気付いていない訳でもあるまいが、ソネットはさらりと言葉を続けた。

「さて。私に一つ、思いついたことがある」

全員の注目を集めてから、ソネットはおもむろに口を開いた。

「あの魔物は、サラサのことを知っている……というより、仲間だったかのようなことを口にしていた。それは、どういうことか」

ちなみに、これらの会話の間に、トキも公子に釣られて立ち上がっている。どうも先程からスゥやソネットに押されっぱなしなのは、彼女達の視線の下という位置が良くないせいでもあると、気付いたのかもしれない。

「そういえば。サラサさん、彼女は一体……？」

「サラサは魔物だ」

「えっ……?!」

驚く公子に、スゥは「昨夜、話をしたじゃない」と言いそうになる。が、直ぐに気付いた。そういえば、スゥがサラサについて尋ねたとき、公子は着替えの為に別室に移動していたので、そんな話は聞いていなかったのだった。

「元々は、な。魔物は魔物でも、今はこのように、私達ために働いてくれる、良い子でいる。神官殿の力のお陰だが」

「ちょっと待て、もしかしてそれは、先週、神殿で浄化したとかいう、魔物の種のことか？」

ソネットは、トキとは最小限しか口を利かないつもりらしい。答えようとしないソネットの代わりに、マリィが彼の質問に答える。

「ええ、そうです。種からこの子が……サラサちゃんが生まれたんです」

「しかるべき所で保護していると、報告を受けていたが、その『しかるべき所』が、ソネットの所だったのか?! 確かに、知識もあるし人目にも触れないだろうが、しかし……」

トキには納得できぬ点があるらしいが、話は彼に構わずに進む。

「……神官殿、覚えているか? 拾った魔物の種は、半球形だったことを」

ソネットに聞かれて、マリィは少し首を傾けて、記憶を辿る。

「え? ええと……ああ、そうね、儀式の台に乗せられてた姿は、まあるくお椀みたいだったわ」

「ソネット、それって……サラサは、『半分』だったってこと？」

スゥが言った。ソネットは頷いてみせる。

「あの魔物の言葉からの推測でしかないがな。……元々は二つで一つだった。片方は、私に見つけられ神殿で浄化された。そしてもう片方は、何者かに寄生し、首尾よく成長した……」

「成長した方が、あの声の主……と、言うのですね？」

公子が結論を言葉にすると、ソネットは再び頷いて見せた。

「公子、おかしな現象が起こるようになったのは、いつ頃からだ？」

「そうですね、ごく最近……一週間程前から、でしょうか」

「うむ、時期も合うな」

「そうね、サラサちゃんが生まれたのも、先週だものね」

「じゃ、そうだとして……」

マリィ達の会話に、スゥが口を挟む。

「魔物が寄生している何者か、って、一体誰なの？」

「そう、それが肝心な点だが、それについては……」

視線を動かして、一人の男に固定する。

「トキ、心当たりがある筈だ。思い出せ」

ソネットは相変わらず乱暴な口利きである。

「なっ……」

「破魔の剣を持っていて、魔法に対する知識もある天下の大將軍様が、あっさりと操られた。違うか？」

「……」

ソネットの言葉は不必要に非難的だが、この点については、トキも自身をふがいなく思っているらしく、反論しようとしなかった。

「警備兵達とはかく、お前は魔力そのものを付加されて操られていた。必ず、魔物と……魔物が取り付いているその本人と、直接接触している筈だ」

「そうは言うが……そもそもそんな怪しい人物と接触した覚えなど、ないぞ」

「怪しい人間、などと考える必要はない。お前は、あからさまに怪しい人間に隙を見せて簡単に付け込まれるのか？」

「誰が、そのような不覚を取るものか！」

「ふん、口だけは立派に利くな」

「なんだと？ 大体お前は……」

どうやら、話の方向がずれてきたようである。スゥは「仲がいいのか悪いのか分からないわね」と思いながら、占い札を繰った。滑らかな動きで一枚の札を引く。更に、

「だからこの場合」

と、ソネットとトキの子供の喧嘩のようなやり取りに、割って入った。

「そういった先入観を捨てて、今日の出来事を思い出してもら方がいいのよ」

トキが首を回してスゥを見た。スゥは、右手に持った一枚の占い札を見つめていたが、視線に気づいて、顔を上げた。そして、占い札を皆にも披露する。

「即席だけど、占わせてもらったわ。これは城郭、砦を表す札。通常は、自分の心の拠り所とか、抽象的な意味での砦のことを表すのだけれど、今回は、そのまま森の砦を指していると思う。貴方の本拠地である砦を、ね」

トキは、スゥの言葉をしっかりと聞いている風でいながらも、むっとした顔のままだった。ソネットとの舌戦から、表情を切り替えられていないのである。それに気づいたスゥは、珍しく優しげな笑顔を作った。

「ゆっくりでいいから、朝からの自分の行動を、思い出して。そのうちに、どこかで、記憶が途絶える筈。それが、魔物に意識を支配された時の筈よ」

商売用の笑顔だった。スゥは職業柄、人に話をさせるための対応方法を身に付けているのである。例えば公子のようにのんびりした人間には、きつく思う程質問を投げかけていく方が、効率よく話を引き出してゆける。だがトキのように頑なな所がある人間には、強く問い掛けて更に頑固になれるよりも、優しく接して油断を誘う方が良い。そういう判断をしたのだ。

そして、それは効を奏した。

「と……砦で……今日の出来事、ですか……ええと……」

トキは、スゥから視線を外すと、眉を寄せて、記憶を辿り始める。

その前に、彼が一瞬驚いたような顔をしたことも、また眉を寄せるのは彼が照れたときの癖であることも、スゥは知らずにいる。現時点では、それはどうでもいいことであった。

「いつも通り出勤して……見回りに出て……そうですね、今朝はワンター尚書がいらしていたので、見回りの前にご挨拶に覗きました」

「兄上が？ ……視察に来られているのかな？」

公子が聞いた。

「あ、いえ。最近、よくいらっしゃるのです。星の間の……砦の最上階の部屋からの景色が気に入られたと、おっしゃって」

「『星の間』か。最上階だから、見晴らしはよいだろうが。そうか、とうとう展望台代わりにまで落ちたか」

ソネットが呟くと、トキが応じる。

「言うな。所詮、我々には過ぎた空間だ。ワンター尚書が相手では、あまりあれこれも言えんのだ」

「ほほう、お前でも、肩書きには敬意を表するのか」

更にソネットが余計なことを言ったので、また二人の舌戦が始まるかと思われた。が、トキは何も言わなかった。それどころか、口をしっかりと閉ざして、考え込んでいる。

「……ちょっと待てよ……」

何かに気付いたらしい彼は、独り言を続けた。

「……見回りに入る前に、星の間に上がって、ワンター尚書にその旨報告して……した筈だが……」

沈黙が生まれる。トキの言葉から、嫌な予感を受けた公子は、眉を顰める。

「トキ、まさか……」

「……星の間から退出しようとしたときから後のことが、どうしても、思い出せない。どうしても……思い出せない!？」

「つまり」

重くなった空気の中、ソネットがはっきりと言葉を口にした。

「元凶は、ワンター尚書、ということだな」

「ば……馬鹿な。兄上が、そんな……」

公子が、殊更に明るい声を出した。否定したい、という気持ちがそうさせたようである。だが、誰も否定はしてくれなかった。否定のしようが無かった。

「ありえない、とは言えないわよ？ 冷静に考えて見れば、公子、貴方に万が一のことがあったとき、公族の長女を妻に持つワンター尚書は、随分と得をするのではなくて？」

「……………」

静かに、スゥが指摘する。公子は言葉を失っていた。きゅっと唇を噛む。

「とりあえず」

ソネットが、一際はっきりと言葉を発した。

「元凶がはっきりしたのだ、先を急ごう。魔物が『星の間』にいるのなら、そこを離れることはない筈だ」

何故魔物が移動しないと言えるのか、それをスゥは疑問に思ったが、ソネットに尋ねることは出来なかった。彼女は、更に言葉を続けたためだ。

「信じられないというなら、自分の目で確かめればよいことだ。何が目的か、なども、本人に直接聞けばよい。今はとにかく」

「行くしか……ないですね」

公子がソネットの言葉を受ける。覚悟を決めた、という風情だった。

「分かりました、砦に向かうことにしましょう。出来るだけ、急ぎましょう。案内いたします」

トキが公子を促す。と、マリィがおずおずと口を開いた。

「あの、兵士さん達は……？」

「放って置け」

即答したのは、ソネットだ。が、マリィは当然、納得しない。

「でも……」

「暫くすれば、目を覚ます。今は、とにかく急いだ方がいい。しつこいようだが、一度は撃退したとはいえ、いつまた仕掛けてこられるか、分からないのだぞ」

「ええ、そうね……分かったわ」

漸くにして、マリィも納得した。けれども、素直に言うことを聞いた訳でもなかった。彼

女は、振り返って周りの木々に向かって、こう語りかけたのである。

「みんな、この人達が目を覚ますまで、守ってあげてね」

さあっと風が吹きぬけて、木々の葉が揺れる。それは、彼女の頼みに対して承諾を示しているのであろうか。

「……親切なことだな」

ソネットは、そう呟くと、くるりと踵を返して歩き出した。それを契機に、皆も歩き出す。

「マリィさん」

歩き出しつつ、公子がマリィに声をかけた。

「……ありがとう」

マリィが顔を上げると、公子は既に、彼女の前方へと移動してしまっている。マリィは、公子の背中に向かって少しだけ微笑んで、それから、下に視線を戻した。そこには、サラサが立っている。不思議そうに、マリィの顔を見上げていた。

「さ、サラサちゃん、行きましょう」

マリィはサラサに手を差し出すと、彼女の手を繋いで、歩き出した。

こうして、人を増やした一行は、再び砦に向かった。

トキは流石に良く森に馴れていて、ソネットのように最短距離を目指しながらも、比較的歩きやすい所を案内する。お陰で、程なく一行は目的地に到着した。

重なり合う木々の隙間から、石造りの堅固な壁面が覗く。どうやら、砦の裏手の方に来たらしい。建物を回り込む感じで、更に進んだ。

と、俄かに視界が開ける。短い草に覆われた地面。砦に庭はないだろうが、そう思えるような空間であった。

その空間の端で、一行は足を止めた。先頭を歩いているトキが立ち止まったからである。彼から斜め後方にいたソネットも、固まったように歩みを止めた。

「どうか、したかい？」

公子がトキに声をかける。だが、トキは答えなかった。彼は、ある一点を、見つめている。

「……………」

トキの視線を、公子も辿って見る。スゥとマリィも、公子に倣って視線を動かし、同じ物を見る。

そこには、一人の男がいた。男は、腰を屈めて、何やら地面に細工をしている。作業に集中していたようだったが、大勢の人間の気配に気付いて、男が体を起こした。そして、男の目と、全員が目とが、合う。

「……あれ？」

のんびりとした口調。小柄な体の、大柄な動き。優しげな顔つき。若い男であった。

「……コウ！」

男と女の声が重なって、その男の名を呼んだ。ソネットとトキの声である。

更に二人とも、それ以後、言葉を発することも出来ず、ただ呆然と男を眺めている。仲が悪くても、こういうときの行動は揃うものらしい。

呼ばれた男の方は、二人の行動などおかまいなしに、にこにこ笑っていた。

「……誰なの？」

髪を軽くかき上げながら、スゥが代表で聞いた。どちらが答えてもよいところ、またもや二人同時に、答えた。

「コウは私の、弟だ」

「コウは私の、夫だ」

が、今度はぴったり同じではなかった。最後の部分でずれが生じている。前者はトキの言葉で、後者はソネットの言葉。けれどもスゥ達は、それを俄かに認識は出来なかった。

「……お……っと？」

「……おっと……」

「って、え、『夫』?!」

漸くにして認識した後、その言葉の意味を理解する。理解して、驚いた。もっぱら後者の言葉に対して、である。

「ソネット、貴方……結婚、してたの?!」

これも、二人の人間の声が重なった。但し今度はスゥとマリィの声であった。

「嘘お……」

思わず呟いたものの、この場でそんな嘘を言う必然性もなければ、ソネットがその手の冗談を言う性格ではないので、本当のことだろう。

つまり、ソネットにとってトキは、義理の兄に当たる訳である。道理で、ソネットがトキを見知っているはずである。仲が悪かろうが、付き合いが切れるものでもなかろう。

当惑する二人と同じく、公子も、困惑の色を隠せないでいる。

「トキの弟? ……が、ソネットさんの……夫？」

公子は、確認するように、ゆっくりと呟いた。

「あ、……は、はい、公子。弟の、コウ・リィ・ゲインです。お目通りいたしますのは、初めて、ですが」

動揺覚めやらぬ様子ながらも、トキが公子に、紹介を行う。

「ああ、公子様でしたか。失礼致しました。弟の、コウです。いつも兄がお世話になっております」

人懐っこい笑顔のまま、紹介されたトキの弟、コウが言った。丁寧ではあるが、兄の主君である公子に対してと考えると、随分と砕けた挨拶である。が、本人に悪気はないようだ。しか

も公子は公子で、

「あ、いえ、こちらこそ、お世話になっています」

などと、釣られて挨拶を返している。堅物でつんけんとした感じのする兄と違って、弟は人を和ませる性質をもっているらしかった。突然降って沸いたように、のんびりとした空気が流れた。

が、冷たく強張った声が、それを破った。

「帰ってきていたのなら、何故、連絡しない」

ソネットが、コウをきっと睨み付けている。首を回して彼女を見るコウは、それでも笑顔を維持する。

「帰った訳じゃないからだよ。仕事、なんだ」

「それは分かっている。何も用もないのに、こんな所でうろうろしているとは思わん。だが、ひと月に一度は私の前に顔を出せ、と、あれほど言っているだろう」

「うんー、終わったら、ね、行こうとは、思ってたんだけど、ね」

「嘘を付け」

「……うーん……」

ソネットの責めは厳しい。笑顔の中にも、ちょっと困ったような色を浮かべて、コウは自分の頭を掻いた。

このやり取りからすると、なるほど、二人は一緒に住んでいる訳ではないらしい。ソネットの家には、どう思い返して見ても、他に人が、それも男性が居る気配などはなかったが、それで当然なのだ。

「それにしても、ここで、何をなさっていたのですか？ お仕事、とは……？」

「あ、ええ、今は、ちょっと結界を張っていたんです」

公子が疑問を口にすると、これ幸いとばかりに、コウは話題を転換させた。

「『けっかい』？」

「えーと、逃げられないように、檻を作ったってことです」

質問にきちんと答えはするものの、前提知識が違いすぎるらしく、公子他一同には、易く理解はしがたい話が続く。それに気付いたコウは、少し考えてから、言った。

「うん、順番に説明します。まず、僕のこと。僕は、サンポスの魔術学園で研究活動をしています」

「……サンポス 魔術学園の、職員、ですって?!」

声を上げたのは、スゥだ。

サンポスという国は、マーシャル公国よりも南方に位置する小国である。特に重要な産業を持つでもない、ごくごく小さな国だが、その名を世界中に知らしめていることが一つある。それが、魔術研究である。サンポスの魔術学園の研究は世界でも最先端のもので、その「生徒」となることでさえ、魔術を学ぶ者の夢と言われる程だ。この目の前の男は、スゥとさして変わらぬ年で、その学園の「職員」だという。

「客員ですけど、ね。で、僕は下っ端なので、外の仕事を押し付けられちゃうんです」

苦笑してコウが付け加えるが、それにしても、ごく稀な人間であることには違いない。

と、ここで、マリィが気付いた。

「外の仕事って……もしかして、サンポス魔術学園が行っているって言う、魔術がらみの事件や紛争を解決する活動のこと、ですか？」

「まあ、世間では、そんな風に言われてますね。言葉ほど、大層なことをしてる訳じゃないですけど」

コウは相変わらず、さらりと言葉を続ける。しかしマリィは、さらりとは聞けない様子で、戸惑いの表情でスゥの顔を見た。

スゥには、マリィの表情の意味が分かる。最初は、彼女の小さな親切心から始まったことが、ここまで大きな話になって、戸惑わない訳がなかった。

スゥもマリィと同じく戸惑いはあったが、一つ息を吐いてから、コウの話の続きを促した。

「で、今回ののもその『外の仕事』ってこと？」

「はい。……あ。話が長くなりそうだから、作業しながら話しますね」

言うなりコウは、地面へ視線を落とした。一本の木の枝を拾い、なにやら地面に書き始める。その作業の傍ら、彼は言葉を続けた。

「そもそもの始まりは、エネーティ公国在住のとある魔術師が行った実験の失敗、なんです」

地面に視線を落としたまま、コウが話す。

「『魔物の種』については、ご存知ですね？ 実物さんが、目の前にいらっしゃいますし」

コウが顔を上げた。視線の先は、マリィの側に隠れるようにして立っている黒髪の少女、サラサである。皆も彼につられて、サラサを見た。見られているサラサは、困ったようにマリィの手をきゅっと握った。

サラサに優しくに笑いかけると、コウは、再び地面へと視線を戻し、作業を再開する。

「さて。その魔術師は、『魔物の種』を使って、特定の人物の複製を作る実験をしていました。目的の人物に寄生させ成長させることで、相手の容姿、性格、言動の癖、それに感情や思いに至るまで、そっくり再現させようというものです」

「複製……人間の？ そんなことが出来るの？」

眉をひそめて、スゥが聞いた。

「理論的には可能、だと、言われています。実現段階には、到底届いていませんが。そして、その魔術師が行った実験も、見事に失敗しました」

コウが一旦、手を止めた。ちょっと考えるように、右手の枝で地面を突付いている。その間も、変わらず話は続行する。

「その事件そのものについては、エネーティ公国の中だけのことで、どうでもいいことでした。ところが、実験失敗の事故によって、実験材料であった『魔物の種』が、よりもよってマーシャル公国へと飛んで行ってしまった」

ふと、何かを思いついたように、コウは右手を挙げた。それからおもむろに、地面へとまた文字を書き出す。どうやら、口は説明をしているが、その他の部分は作業の方に集中している

らしい。器用な人である。

「これが、大問題になりました。現在、マーシャル公国とエネーティ公国は、けして友好的であるとは言えない状況です。そんな中、マーシャル公国内で、魔術に絡んだ事件が発生したりしたら……」

「当然、マーシャル公国とすれば、エネーティ公国を疑います……ね」

公子が言った。マーシャル公国の代表としての意見であった。

「そこで、僕の仕事です。事件に発展する前に、『魔物の種』を回収すること。……よし」

急にコウが、納得したように頷いた。それから、手の木の枝を、元の場所つまり地面の上へと戻した。作業が終了したようだ。

コウは、皆の方へと向き直った。

「種のうち一つは、神殿に回収されたらしいことが分かりました。それで、もう一つの方の行方を追っていたんです。そんな中、大きな魔術が使われているのを見つけたので、追いかけてみました。そうしたら」

にっこりと笑って、コウは、トキを見る。

「こんな所に出ちゃったから、びっくりしたよ。場所が場所だから、兄さんに相談しようと思ってみても、兄さんどころか兵士さん一人すらいないし……もしかして、兄さんに寄生したんじゃないかって、心配してた」

「操られは、していたがな」

言ったのは、ソネットである。トキがソネットを睨み付けるが、彼女は知らぬ顔でその視線を受け止める。

「そうなの？ まあ、こうして無事なんだから、いいけど」

と、コウはさらりと流した。兄と妻の言い合いは通常のことであるらしく、彼はそれを気にする素振りもない。

「とにかく、種が寄生している人がここにいることは、間違いない。だからこうして、逃げられないようにした訳です。……けど、じゃあ今『星の間』に居るのは、誰？」

「そうか、やはり、星の間にいる人物、なんだな……」

尋ねられたトキは、独り言を呟いてから、答えた。

「……多分、ワンター尚書……だ」

「……………そう」

少しの間を開けてから、コウが小さく応じた。

「手遅れなのは分かってたけど、思っていたより、状況は良くないね」

「いえ、そんな。こんな大事になったのは、今朝からですし」

慰めるように、公子が口を挟んだ。しかし、それは逆効果だったようだ。

「そうですか。ということは、公子様にご迷惑をおかけしたみたいですね」

少し憂いを含むような微笑で、コウは公子に詫びた。

「申し訳ありません。僕がもっと早く、手を打てていれば」

「いえ、そんな……」

静かに頭を下げるコウに、公子は慌て、彼の顔を上げさせるのが精一杯であった。

コウがようやく頭を上げたとき、

「……で、どうすればよいのだ？」

と、ぶっきらぼうにソネットが言った。

「ワンター様は、大丈夫なのかしら……？」

マリィが、建物を見上げながら、呟く。更に、スゥが続けた。

「魔物にすっかり寄生されきってるんでしょうからね。あれだけの魔術を使ってくるのだから」

「そうですね。うん……」

コウは、握り拳を額に当てた。彼が考えるときの仕草であるらしい。

「とりあえず、ワンター尚書の方は、兄さん……いや、公子様に、お任せするしかないかな」

「私に、ですか？」

突然指名された公子が、目を丸くする。

「はい。あの魔物は『力』に寄生します。そして、人の『力』とは、生きる力そして心の力。

魔物に寄生されたということは、心の隙に入りこまれたことに他なりません」

コウは、手を下ろして、公子を真っ直ぐに見た。

「ワンター尚書から魔物を引き離すためには、尚書の心の隙を埋めてやるのが一番。心の平静を取り戻してやらねばならないのです。……となると、それが出来るのは多分、尚書と最も近い者である公子、貴方だということです」

「私……が……しかし……」

公子は、戸惑いを隠そうともしなかった。

確かに、ここにいる人間の中では、義理の弟にあたる自分が最も近い存在である。かといって、義兄の心の内を知る程に、親交がある訳でもないのも事実だ。公子が、与えられた使命に自信が持てないのも当然であった。

「……大丈夫、ですよ」

穏やかに口を出したのは、マリィだった。マリィは、胸の前に手を組み、きりりとした瞳を上げて、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「心の隙、ということは、きっと本人が、満たされていないと思っている気持ちのこと、だと思うのです。でも、神はいつも、私達を見守って下さっています。満たされる気持ちも、本当はすぐ側に用意して下さっている筈なのです。ただ、自分で見つけられずに居るだけ……ですから、とにかく、ワンター様とお話をしてみましょう？ きっと、何か……何か、できることがある筈です」

「マリィ、さん……」

公子はマリィを見つめていた。三度瞬きをして、それから、ふと笑みを零した。

「そう……そうですね。行きましょう。とにかく、今やれることを、やらなくては」

「そうそう。なんとかかなる、でしょ。思い出してくれる？ 昨夜の私の占いで、貴方がしなくてはならないと出たことを」

スゥが言葉を付け加えると、公子は彼女にも笑みを向ける。

「はい。『内省』でしたね？ 私の知っていることが、何かあるんですよ。だったら、必ず

何か、私に出来ることがある筈です」

公子のやる気溢れる姿に、トキも口を出した。

「公子、私も共に参ります。もしものときも、私が公子を必ず、お守りいたしますので」

「勢い余って、全部斬り捨てたりしないように、な」

水を差したのは、勿論ソネットだ。トキがソネットを強く睨み付けるが、予想通りソネットは、知らぬ顔をしている。そして、ソネットは言葉を続けた。

「.....私は、ここで居よう。サラサも、な」

「そうだね。魔物が逃げ出したところを捕まえないといけないし」

コウが、ソネットに同意する。

それから、公子の方へと向き直り、表情を正した。

「では、公子。.....お願い致します」

「.....はい。後は、よろしくお願ひします。.....では」

公子は、りりしい微笑みのまま、足を引いた。砦の入り口へと向かうために、方向を変えたのである。

その公子の腕を、引っぱる力があつた。

公子は足を止められ、その力の主を見る。それは、サラサだった。彼女は、両手で公子の袖を掴み、両目で公子の顔を見つめている。

「? どうしたんだい？」

公子が穏やかに尋ねると、やっとの様子でサラサは、口を開いた。

「.....ありがとう」

それだけ口にするのと、サラサはぱっと手を離し、ソネットの背の陰まで駆けて行った。

彼女の言葉が何を意味しているのかを掴みかね、公子はきょとんとしている。そんな公子に、目だけサラサを追っていたソネットが、説明を加えた。

「先程、この子は公子に助けられた。.....そういうことだよ」

つまりサラサは、公子が彼女を魔物の攻撃から庇ったことに対し、感謝の言葉を述べたということだ。それを聞いた公子は、嬉しそうに、表情を崩した。

自分の行動が誰かの役に立った、それが嬉しく思えるのは勿論である。が、このときの公子は、それ以上の思いがあつた。これから向かう場所、そこでも自分が、きっと何か出来るという自信を、彼女の言葉は与えてくれたのである。

「.....はい」

それだけ言うと、公子は、改めて体を向き直した。口の両端を引き、しっかりと正面に砦を見上げる。

「では、行きましょう！」

公子が一步を踏み出すのを契機に、トキ、マリィ、スウの順で、一行は砦の中へと入って行った。

公子一行が砦の中へと入るのを見送ったコウが、くるりと体を反転させた。視線の先には、空間にそぐわない桃色の服に身を包んだ、ソネットがいる。

「今日は随分と可愛いね。けど、あんまり兄さんが嫌がることをしちゃ、だめだよ」

そう、魔除けの意味においてこの桃色は必然でも、この形は必要ではない。それでもソネットが敢えてぬいぐるみのような形を作ったのは、この手の類を嫌うトキに対する当てつけのためなのだ。コウにはそれが分かっていた。

「……………」

ソネットは黙っている。彼の意見が正しいことを認めているようなものだ。同時に、彼の注意に添うつもりもないという表明でもある。

そしてソネットは、自ら違う話題を発した。

「ところで、その事件とやらだが」

「詳しく聞きたい？ でも、たいした事ない事件だよ」

と、言いながらも、コウは語り始めた。

「ホクリコさんって言ってね。エネーティ公国の田舎の方から、家族を置いて町に出てきて、研究をしていた魔術師さんなんだ。で、単身赴任が長くなって、淋しかったみたいだね。だから、娘さんの複製を、側に置きたかったみたいだよ。そのままそっくりでなくてもいいから、って、焦ってやり過ぎちゃったんだね」

「……馬鹿が」

「そんな風に言っちゃ、駄目だよ。やったことは悪かったけど、気持ちは汲んであげないと、ね」

コウは、先ほどまでも笑顔だったが、今はもっと明るい笑顔になっている。ソネットと話すのは、楽しいらしい。

「しかし、あれは二つで一つだったろう？ 何故だ？ 予備か？」

「ああ、えっとね。娘さんは、双子だったんだ」

「……なるほど」

ソネットは、後ろを振り返った。彼女の影に隠れるように、けれども彼女とも一定の距離を置いて、サラサが不安げにソネットの顔を見ている。

「ということは、二つとも回収するのか？ この子も？」

「ううん、サラサちゃん……だったよね。彼女は、いいよ」

ソネットが視線を元に戻す。コウはやっぱり笑顔のままだ。

「神官長どのが、なされたこと。最早、僕がとやかく言う必要はないよ」

「では、問題は一つだけ、か」

「そうだね。素直に言うことを聞いてくれれば、天寿もまっとうできるだろうけど」

コウは言いながら、場所を移動した。少し歩いて、先ほど自分が地面に書いた線の上に立つ。そして右足をすって、線を消してしまう。

「何のつもりだ？」

「逃げ道を作ってるんだ」

コウは短く答えた。

「……つまり、逃げてくるところを捕まえる、ということか」

わざと術に綻びを作り、魔物がそこを狙ってくるのを待ち伏せる。そういう作戦だと、ソネットは気付いた。素直に寄生主から分離しないであろうことを予測した行動である。

ぼんやりしているようでいて、抜け目はない。彼女の知っているコウの人物象そのままに、彼は今日も居た。

「……とんだ娘に成長したものだよ」

言葉面に比べさして気の毒でもなさげに、ソネットが吐き出した。それから視線を上げ、建物の最上階の窓を眺めやる。

ソネットの行動に倣って、コウも窓を見上げた。

「さて。僕達は、ゆっくり待ちますか」

それ以後、二人は沈黙を守ったまま、ひたすら窓を見つめている。サラサが二人を、やや不思議そうに見ていたが、それを気にする様子も全くなかった。

一方、公子一行は、砦の階段を一気に駆け上っていた。

コウの先導で早足に進むが、なにぶん、目的地は最上階である。スゥは息が苦しくなりつつあった。マリィもあれで、体力はある。常日頃の職務態度の差かもしれない。

息が上がってしまう前に、と思って、スゥが口を開いた。

「……一つだけ、聞いてもいいかしら？」

そこで一旦、言葉を切った。階段の踊場に着いて、一息ついたからだ。

「ゲイン将軍、『星の間』って、何なの？」

「えっ?!」

何故か、トキは驚いて振り返った。思わずスゥが「私、何か変なことを聞いたかしら？」と考えるほどの、驚きぶりである。が、別に質問の内容が問題だった訳ではなく、声を掛けられたことに驚いただけらしい。

「『星の間』は、コウが詠えた、特別な部屋……なのです」

と、すぐに気を取り直したトキは、彼女の質問に答えた。

「魔術の観点から見て、とても完成された空間だ、と……」

「……どういうこと？」

「良くは私には分かりませんが、魔物が『居る』のには、さぞ居心地が良い筈です」

「ふうん……そう」

実際のところ、スゥは完全に納得した訳ではない。が、それだけ聞けば、あとは実物を見れば分かることだ、と判断したので、それ以上の追及を止めた。

それ以後、誰が口を開くでもなく、一行は最上階に辿りついた。

最上階には、部屋が一つしかなかった。全員が扉の前に集まったのを確認して、公子の前に一步出たトキが、部屋の扉を開けた。部屋に光が差しこむ。

部屋は、比較的からんとしていた。所々に物品が雑多に置かれ、まるで物置だ。入り口と正反対の位置に窓がある。

「な……なんてこと、この部屋って」

そして、部屋を一目見て、スゥは気が付いた。

「完璧だわ。風の流れ、太陽と月の軌道、それに……ああもう、入り口と窓の位置なんて、理想的。よくもまあ、これだけ条件を揃えられたものね！」

珍しく興奮した様子で、スゥがまくし立てた。

先ほど、トキが『魔術の観点から見て、とても完成された空間』と言った。それはつまり、魔術を使うにあたり、己が力を十二分に発揮するため要求される条件が、見事に整えられた環境だということを、スゥは見てとったのである。

魔術だけではない。スゥが占いをするのにも、ここは、良い環境であった。だから、スゥは気を高ぶらせたのだ。

「いいわね、こんなところで占いが出来たら、どんなにか……それなのに」

急に、スゥはトキに指を突き付けて、責めた。

「どうして、こんなに箱や棚があるの?! これじゃ、折角の環境が台無しだわ!!」

「う……い、いえ、我々には使えぬ部屋ですので……」

「ああ～、もったいないっ! そんな、もったいないことをしてるから、空気が淀んで魔物なんか住み着くんじゃない!!」

スゥの非難に、トキは返す言葉がない。

けれども、あってもきっと口には出来なかつたろう。他に言葉を発した人物が居たからだ。

「……騒がしいぞ、ゲイン将軍。どうしたのか？」

棚の向こう側、細長く開いた窓辺から、一つの人影が伸びている。

公子達が一斉に視線を移動させると、そこには、一人の男が静かに立っていた。

「……兄上」

公子が一步、前に出た。

男は、すらりとした長身で、顔貌の整った、いわば美男に類する姿の持ち主である。服装は上品な色合いのものだが、どこか派手な雰囲気のある人物であった。

男は特に、どうというでもなく、ただそこに立っている。公子は言葉を続けられず、男をただ見つめているだけだ。

そこで突然男が、エース・ワンター尚書が失笑した。

「聞くまでもないな。この者に、用があったのだろうか？」

「そうなんですよお～？」

甘えたような若い女の声。トキ以外の者は、その声に覚えがあった。トキの肩から聞こえていた声、つまりは、トキを操っていたあの声である。一行が、はっと表情を引き締めた。

彼等をからかうような、耳障りな笑いを響かせながら、声の主は、ワントーの影から姿を現した。

黒く長い髪を肩から腕に絡ませた、少女の姿であった。大きな真紅の瞳に一行の姿を映している。丁度、サラサと同じ位の年恰好であるが、サラサと違って妙な艶かしさを持っていた。

「あたしはエリス。パパが付けてくれた名前よ、素敵でしょ？」

少女は、体をくねらせて、ワントーの腕にすがり付く。「パパ」というのは、ワントーの事に違いないが、無論この少女が、彼の本当の娘である訳ではない。

「……兄上から、離れて下さい」

公子が、本題をいきなり切り出した。落ち着いた声で、威圧する力もある。

「い、や」

少女エリスの答えは明瞭だ。

「もう、貴方には逃げ場もありません。これ以上は、無駄なあがきです」

公子が言ったことは、エリスも十分に理解していた。外に結界を張られていることも気付いていたし、目の前には、トキの持つ『退魔の剣』と、マリィの持つ強力な『守り』がある。確かに、まともにぶつかっては彼女に勝ち目はない。

「……でもねえ、あたしには、パパがいるんだよお？」

エリスがにやりと笑うのと同時に、ワントーが床に崩れ落ちた。

「兄上っ?!」

反射的に駆け寄ろうとする公子を、トキが止める。エリスはその様子を見て、甲高く笑った。

「きゃはっ、パパのこと、心配？ 大丈夫よお、死んじゃったりは、しないもん」

「……そりゃあ、宿主を殺してしまえば、自分の力の源も失うんですものね」

スゥが言った。エリスがワントーを盾にしようとしているのは明らかだったので、それは出来ないことだと釘をさす意図がある。だが、それは効果を発揮しなかった。

「何よ何よっ！ あんた、パパが大事じゃないって言うの?! 偉そうに言って、あたしと違って、ちっともパパを気に掛けてないってこと?!」

むしろ、エリスを興奮させてしまったようである。だが、そのお陰で発せられた言葉が、意外なことを公子に気付かせた。

「パパは、あんたなんか、大っ嫌いなんだからあっ！ あんたさえいなければ、パパは、心を迷わせることなんか、なかったんだもんっ!!」

ここでエリスが言っている「あんた」というのは、公子を指しているに違いなかった。彼女が憎憎しげに睨み付けた相手は、結果兆発となった言葉を口にしたスゥではなく、常に公子であったことから、分かる。とすると、公子が義兄に嫌われている、というのは理解できるにしても、「心を迷わせる」とは、如何なる意味なのか？

「兄上。私は……兄上に、何か、しましたか……？」

倒れているワントーに向かって、公子が問いかける。ワントーは、彼の声が聞こえているのかいないのか、びくりとも動かない。けれども、代わりにエリスが答えた。

「馬鹿馬鹿馬鹿あっ!! わざわざお姫様の真似して、パパのこと、からかった癖にいっ!!」

「……………あっ……え？」

公子は、何かを思い出したようである。だが、それについて何か口にするより先に、エリスが動いた。

倒れたワントーの前に一步出ると、改めて公子を睨み直した。同時に、エリスの髪が逆立ち、その隙間から零れるように、光が現れる。真白い羽根であった。

「もおおっ!!」

エリスが叫ぶと同時に、羽根がばさりと一度、羽ばたいた。そこから、羽根だけで起こしたとは思えぬ強風が、一同に向かって襲い掛かった。たまたら、公子もトキも、そしてスゥも、腕を上げて顔を庇う。

が、その必要はなかった。風は一瞬で途絶え、彼らに届くことは無かったのである。

「……マリィ、さん？」

ゆるゆる顔を上げた公子が後ろを向くと、跪いて手を組み、祈りを捧げる姿のマリィがいる。彼女の御守りの力が、皆を守ったのだ。御守りが作り出した守りの光は見なかったけれども、公子は直ぐにそれを悟った。

「きいいいっ！ もう、もう、もおうっ！！！」

ヒステリックに喚き続けるエリスの言葉は、最早、意味を為していない。

それを、立ち上がったマリィが、穏やかに遮った。

「……ごめんなさい、余計なことをして」

何を謝るのよ、とスゥは思ったが、マリィにはこれも考えがあつての行動だった。彼女はスゥに一瞥を送り、頷いて見せてから、エリスの方へ向き直る。

「もうしないから、もう少し、私達とお話しましょう？」

そうして微笑みかけると、エリスは黙って、羽根を仕舞った。マリィが下手に出たことが、彼女に安心感を与えたいらしい。大人びて見えても、やはりサラサと同じ位の精神年齢、まだまだ子供であるのだろう。

「ねえ、どうして貴方は、公子様の命を狙ったの？」

「……だって。パパ、嫌いだって……」

ワンターを横目で見ながら、エリスは答えた。

「どうして、嫌いだって、おっしゃったの？」

「……………」

今度は答えない。公子の方を、ぎっと睨み付けている。

「公子に悪いところがあったと、そう言うのね？ だったら、それでいいのよ。悪い人には、罰を与えるべきなもの」

そう言ったのは、スゥであった。その、公子を責めるような口振りに、公子とトキがぎよっとする。けれどもスゥは、涼しい顔をしていた。更にマリィが、

「そうよね。何があったか、聞いてもいいかしら？ 公子様、何か思い出したことが、おありなんですね？」

と続けたので、男二人も、ようやく彼女達の意図に気付く。

ここに来る前に、コウが一行に指示した通り、彼らはワンターが魔物の寄生を許した原因を突き止めなくてはならない。そのために、出来るだけ多くの会話を持とうと、彼女達はしているのだ。

「『お姫様の真似』というのは、多分、私の変身のこと、ですよ？ とすると……」

表向きは自分に有利な状況に、エリスも気を良くさせているのか、素直にしている。公子はゆっくりと、言葉を続けた。

「私の変身した姿を兄上がご覧になったのは、一度だけです」

それから、公子はそのときのことを説明した。内容は、おおむねこうなことだ。

数週間前のことである。城内で例によって女性の姿に変身した上で、外に抜け出そうとしていたとき、偶然中庭を散歩していたワンターと鉢合わせてしまった。侍女の振りをして通り過ぎようとした公子だったが、ワンターに止められ、名を問われた。逃げるに逃げられなくなって、仕方なく正体を明かした（つまり変身を解いた）。こうして、ワンターは公子の能力を知ることとなった。

「……その結論は、違うんじゃないかしら」

話し終えた公子に、スゥが言った。彼女はいつのまにか、占い札を三枚、手にしている。

実は、先程マリィの目配せを受けてから、スゥはこっそりと占いをしていたのである。内容は勿論、「ワンター尚書の心の隙間」について、である。状況が状況なので、じっくり占える訳もなく、彼女は三枚の札を使って占うことにしたのだった。

公子の話聞きながら占っていたスゥだったが、現れた三枚の札を見て、彼女は驚いた。その三枚は、最近見た覚えのあるものだったからだ。昨夜、ソネットの指図で、公子について占ったときに出た、彼女が意味を掴みあぐねたあの三枚、だったのである。

『……全ての元凶を、この三枚が、現しているんだわ』

その前提でもって公子の話解釈すれば、三枚の札の意味を理解していける。スゥは、そう思った。だから、公子の話のおさらいをするように、吟味を始めたのだ。

「ワンター尚書が貴方を見咎めたのは、不審者だったからじゃないと思うわ」

「……そう……目を、奪われた……」

スゥの言葉を受けて、力ない言葉が部屋に響いた。

ワンター尚書であった。いつの間に目を覚ましたのか、彼は、ゆっくりと体を起こしている。エリスの興奮が収まったことで、彼へのエリスの支配力が弱まっているのかもしれない、とスゥは推測した。願ったり叶ったりの状況である。

ワンターは、ゆるゆると体を持ち上げると、そのまま、後ろの壁へと持たれかかった。窓の下に腰を下ろした格好で、その表情は逆光に紛れて見えないが、生氣のない気配は分かる。かなり消耗しているようだった。エリスが、彼の隣に添うようにその腕に継り付いたのも、意識していないようだ。

「目を、奪われたのだよ。姫のいるその城の中だというのに、私は、見ず知らずのその女の姿に、目を奪われた」

ぼそぼそと、ワンターは言葉を綴った。

『まずは、『不誠実な恋愛』、ね……』

スゥは、一番上の札を一枚、占い札の山へと戻した。残るは二枚。頭は研ぎ澄ましつつも、静かにワンターの次の言葉を待った。

「しかも、そのまま見過ごせなかった。よせばいいものを、彼女を捕まえようとして……そして、結局、自分の愚かさを思い知らされることになる。目を奪われたそれは、よりもよって、義弟だ。愛する妻の、弟だったとは……」

言葉の後に、自嘲の意を含んだ、力ない笑いが続く。公子が、眉を顰めた。

『これが、『軽はずみな行為』、か……』

ワンターと公子の両方を交互に目で追って、スゥは心の中で呟いた。

ワンター自身が『愚か』と言ってるように、要するにワンターは公子の女装に惹かれ、手を出そうとしたわけだ。ありていに言えば、浮気の意味があった、ということだろう。一国の尚書ともあろう人間にしては、確かに『軽はずみ』である。

公子は公子で、人目をはばかる場面に、敢えて目を引く美女に変身したのは、軽率と言える。つまり、公子の『軽はずみな行為』がワンターの『軽はずみな行為』を生んだのだ。公子が眉を顰めたということは、彼自身も、この結論に至ったのであろう。

「あ、兄上……」

「姫を失うことより、恐ろしいことはないのに……私は自ら、破滅の種を作ってしまった」

公子が何をか言わんと口を開いたが、ワンターは遮り、独白を続けた。

「毎日が不安だった。ただここで……ここで、森を見ていると、不思議と心が落ち着いた。そのうちに……声がした。私を慰める声……それが、エリスだった」

首を傾けたワンターの腕に、エリスはしっかりとしがみついた。自分だけが、彼の味方であるかのように、他の全ての人間を睨み付けている。

『で、あれが、『新しいものの誕生』と言う訳ね』

ワンターの強い不安を糧にして、この特殊な空間に守られて、魔物の種は成長したのであろう。そして、ワンターの不安を取り除こうとする、エリスという存在が出来あがったのだ。

「不安の発生源は、つまり、公子。貴方の不貞を知る唯一の人間。その公子さえいなくなれば、尚書の不安は解消される……だから、公子を狙ったのね」

知りたいことは全て明らかになったと、残る占い札も仕舞ったスゥが、言った。小声である。この言葉を聞かせたい相手は、遠くに居るワンターやエリスではなく、近くに居る公子やマリィだったからだ。

ワンターの心の隙間が何であるか、それをスゥは、明確に言葉にしたのだ。

「あ……兄上が、姉を大切に思ってくださってることは、私もよく存じてます。それを疑ったことなど、ありませんよ」

慰めを公子が口にしたが、ワンターは鼻先で笑うのみだ。

そう、誰に信じてもらおうというのではない。彼は、自分で自分の気持ちを疑っている。それが、彼を溜まらなく不安にさせている。そういうことなのだ、とスゥは考えた。そのとき、

「……あの、ワンター様が、公子様の変身された姿に目を引かれたのは、当然じゃないでしょうか？」

と、マリィがおずおずと口を開いた。

「だって、公子様の変身された姿って、オーラ姫によく似ておられるもの」

マリィは、スゥに視線を送った。今から自分が言おうとしていることが良いかどうか、彼女に指示を仰いだのである。スゥは、しっかりと頷いてみせた。

スゥに後押しされたので、マリィは一度深呼吸をしてから、再び口を開いた。

「姫様とご結婚されたワンター様なら……姫様を一番に愛してらっしゃるワンター様なら、当然のことだと、私は思います」

「……………」

見れば、ワンターは、呆けた様子でいる。虚を突かれた、ということか。

「大好きな人と良く似た人を見かけて、驚かない人はいないと思います。思わず目を奪われても、当たり前だと思います。それが、本当に好きな人なら、尚更……」

ワンターは、ふらりと立ち上がった。彼の腕が自分の側からすり抜けて行くのを、エリスはただ見送る。

「そう、だから……今回のそれって、浮気とか言うものじゃない、ですよ」

マリィが訥々と述べるそれを、詭弁だ、とスゥは思っている。ちょっと気を逸らせた位で一々目くじらを立てていてもきりが無い、というのも事実。だが、だからといってマリィの言うように考えて寛大にしているのが普通なら、この世で痴話喧嘩、夫婦喧嘩はもっと少ない筈だ。

しかし今は、それについて云々するべきときではない。だから、スゥは黙って見ていた。詭弁だろうと何だろうと、それで人一人が救われようとしているのだ、何を遮ることはない。

と、スゥが思っていると、彼女の隣で、

「そ、そういうものなのか……」

と、呟く声がした。トキである。

彼は、マリィの意見に素直に洗脳されたいらしい。どうも色恋沙汰に縁がない堅物そうな彼のこと、無理はないかもしれないが、

『貴方が説得されて、どうするのよ』

と、スゥは、こちらには容赦なく冷たい視線を送った。

外野がそうこうしている間も、ワンターはまだ意識が戻らぬが様子で、呆然とマリィの方を眺めていた。

「……わ……私は……」

不安げな視線を正面に受け止め、マリィが微笑んだ。

「胸を張って、おっしゃっていいと、思います。姫様を、それほどに、愛しておられるのだ、と」

「……………そう……か、そうか！ 私は、姫を裏切ってなど、いないのか！！」

俄かにワンターの声が明るくなる。背筋もぴんと伸ばして、表情も蘇る。

『どうやら、成功したみたいね』と、スゥはマリィに、唇の端を上げて見せた。

だが、安心するのは早急であった。まだ、終わった訳ではなかったのだ。

「……兄上！！」

急に、公子が大声を上げた。はっとして、スゥもマリィも、顔を向ける。

その目に映ったのは、ゆっくりと床に倒れて行く、ワンターの姿だった。

「きゃっ……！！」

公子が、ワンターの側へと駆け出している。マリィが、直ぐに彼に続く。トキは、手を剣に置きながらも、公子を追うように彼の背後に付き従う。

そしてスゥは、彼らとは違う方向へと足を踏み出した。彼女の視線が、真っ直ぐ先にエリスの姿を捉える。

「……何をしたの？」

厳しい目をして、静かにスゥが聞いた。

まだしゃがみこんだままだったエリスは、ゆっくりと立ち上がる。

「何をしたか、ですってえ？ あたしは、なんにもしてないわよ。やったのは、あんた達の方じゃない……」

俯いたまま、掠れた声でエリスは言った。白い羽が、広がる。

「あたしから、パパを、取ったじゃないいい……！」

エリスは両手で顔を覆った。『泣いている、の？』とスゥが考えると同時に、ぞぞ、と部屋中の空気が動いた。

瞬間、エリスの白い羽根が、彼女を中心とした円形に、更に広がった。羽根が大きくなったのではなかった。羽根の一つ一つが離れ、散っているのである。エリスから流れる格好の風によって舞い上げられた埃とともに、あっという間に、全員の視界を白いものが埋め尽くしてしまう。目も開けていられない。たまたま、スゥ達は、それぞれ腕で顔を庇った。

しばらくして、ようやく風が落ち着いた頃、スゥが恐る恐る、目を開けて見た。白い羽根は消え去り、空中を漂う埃だけが、窓からの光に照らされて見える。そして、窓の側に居た筈のエリスの姿は、どこにもなかった。

「……逃げられた？！」

言ったのは、トキである。彼もまた、目を開けて、この光景を見たのだろう。窓の方へと向かおうとする彼を、スゥが制した。

「大丈夫よ。外には、貴方の弟がいる。そうでしょ？」

私達が任されたのは、ワンター尚書から魔物の種を引き離すこと。それを果たせたことは、間違いない。ならば、これ以上魔物を追うよりも、今大事なことは何か。

「それより、ワンター尚書は、どうなってるの？」

「あ、うん。気を、失ってるだけ、みたい……」

埃に少し咳き込みながらも、マリィが答えた。

「急に、魔力の干渉が立ち消えた、反動かしらね。大丈夫そう？」

「ええ。念の為に、清めの儀式はしておいた方がいいと思うけど」

ここで、スゥがくしゃみをした。

「……ああっ、もう、埃っぼい！」

「とにかく、ここから出ましょう」

公子が言った。もっともな意見である。

「トキ、手伝ってくれ」

「はい」

男二人でワンターを担ぎ出し、埃まみれにされた一行は、早々に部屋から退散したのであった。

さて、一行が埃に覆われていた頃、砦の外では、コウが少し首を傾げていた。

「……おやおや」

呟くなり、軽く右手を上げる。すると、掌の中に向かって、何かが飛来した。すかさず手を握って、それを捕まえる。

「随分な姿になって、出て来たものだね」

手を下ろして、そっと広げて見ると、掌の上には、小さな種が一つ、乗っていた。形は、半球。ソネットが森で拾った魔物の種と、全く同じ形状のものであった。

「元の姿に戻った、ということか？」

コウの側に近付き、種を覗き見たソネットが、聞いた。

「と、言うよりも、全ての力を失ったんだろうね。宿主からの力のみを当てにして成長したのだから、宿主との繋がりを絶たれてしまった途端……」

「奪って得たものを失った、ということか？」

ソネットがコウの言葉を引き継ぐと、コウはにっこりと笑った。そのまま、ソネットを眺めている。

「……何だ？」

「話が早いな、と思って。そういう所、好きだよ」

「……………」

ソネットは、眉を寄せて口をへの字に曲げた。とても嫌そうな顔である。が、それが、彼女の照れ隠しであることを、コウは知っている。自分の知っているソネットが、そのままにいることに、コウは満足げに笑みを浮かべた。

けれども、まるで自分が考えていることとは違うことを、口にした。

「これで回収、完了。だね」

「……行くのか？」

ソネットは直ぐに表情を消している。

「うん。学院に帰って、報告しないと」

「そいつが何をやったのか、聞かずに、か？」

コウが瞬きをした。ソネットの言葉は、彼を引き止めるものだったからだ。

少し考えてから、コウはゆっくりと口を開いた。

「……うん。寧ろ、何も聞かない方がいいと思う」

コウは、今は彼の掌の中にある魔物の種と、公子そしてソネット達が、一体どういう経緯で関わっていたのか、全く知らない。けれども、それを知らうとすれば、必然的に、公子の能力やマーシャル公族のことを聞くことになるだろう。聞いてしまえば、コウは、学園にその通りを報告せねばならない。すなわち、今回の事件の発端であるエネーティ公国にも、情報は流れるということである。マーシャル公国にとって、それは余り喜ばしいことではなかった。

「公子は聡いお方だから、わきまえて下さるだろうし」

マーシャル公国の情報は、流さない。それと同時に、マーシャル公国側からも、今回の事件についてエネーティ公国を責めることをしない。そうすることにより、少なくとも、両国の緊張をこれ以上高めることはない筈だ。

これが、現時点の最良の判断だと、コウは考えたのである。

「隠蔽するつもりか」

ソネットが言った。言葉面は悪いが、非難する響きはない。彼女には、コウの考えが分かっているのだから。

「まあいい。……体は、大丈夫なんだろうな？」

「うん。この頃は調子がいいんだ。大丈夫だよ」

コウが答えると、ソネットはぷいっと背中を向けた。

「なら、いい。さっさと行くがいい」

「……………。一段落着いたら、一度、帰るよ」

そう言ったものの、ソネットが返事をする様子はない。それでも構わず、コウは、歩き始めた。

そして直ぐに、足を止めた。サラサの目の前で、である。コウは腰を落とし、サラサと視線を合わせると、彼女の頭を撫でた。

「また、ね。それまで、ソネットをよろしく」

サラサは、大きな目でじっと彼を見つめていた。彼の言葉が終わると、こくりと首を縦に振

ってみせる。

再びサラサに笑いかけると、コウは、立ち上がった。そして、振り返りもせず、歩み去ったのであった。

神殿の鐘が、厳かに森に響く。スゥは、音に釣られて、鐘を見上げた。太陽の眩しさに、つい、目を細める。

国境の砦の最上階で、埃まみれになった日から、七ヶ月が過ぎていた。今のスゥは、紫紺の上品な礼服を身に纏い、普段しない化粧までして、随分ときちんとしたものである。

視線を戻した彼女の目の前には、赤い絨毯が神殿までずっとしかれている。新緑のまばゆい緑の中に、鮮やかな赤が良く映えていた。

これまで、何度となく、この光景を描写する言葉を聞いたスゥである。いつかはそんな日も来るだろう、確かにそう思っていた。だが、

『まさかここまで見事に実現することになるうとは、ねえ』

と、スゥは溜息ともつかない呼気を吐き出した。

語っていた本人も驚いていることだろう。スゥの幼馴染のその彼女は、もうすぐ、この絨毯の上を、歩いて来る筈だ。

ふと気配を感じて、スゥはちらりと左を見た。ソネットが仏頂面をして、立っている。上から下まで紺色の布を被ったという感じで、可愛げのない格好をしている。

「久しぶり。元気？」

「無用な挨拶だな」

素っ気無い答えを返すソネットだが、実際のところ、スゥと顔を合わせるのには、七ヶ月ぶりなのである。つまり、あの事件の時以来なのだ。

スゥ達が、埃まみれになって出て行くと、ソネットはその姿を上から下まで見渡して、言ったものである。

「……何をしていたんだ？」

スゥ達に答える気力はなかったが、ソネットはソネットで、答えを求める気もなかったらしい。そのまま淡々と、コウからの伝言を公子へと伝えた。

それが済むと、ソネットは、さっさとスゥ等を置いて、帰っていった。自分の役割は終わったと言わんばかりである。既に居なくなっていたコウといい、ソネットといい、『大変自分勝手ですこと』とスゥは思った。似たもの夫婦なのね、と納得もした。

「ご主人はその後、ご帰宅されたの？」

嫌味がてらスゥが言うと、ソネットは冷たく返した。

「それも無用の言葉だな」

「はい、はい……」

スゥは素直に引き下がった。実際、彼女にとっては、この風変わりな夫婦がどんな状態であろうと、どうでもいいことである。

一度ゆっくりと瞬きしてから、スゥは、視線を動かした。

絨毯を挟んでスゥと反対の側に、上等そうな服を着た男と、衣装のそれよりも当人の美しさの方が人の目を引く姫君が、立っている。ワンター尚書と、その妻オーラ姫である。今二人は、穏やかに微笑み合って、新たに自分達の妹になる人物を待っていた。

『……本当に、まあよく納めちゃって……』

ワンターの、のほほんとした笑顔を、スゥは半分だけ開いた目で見つめた。

彼が心を乱し、魔物の種に取り付かれたことが、あの事件の原因だった。ある意味で彼は、元凶だった訳である。

魔物の種が離れ、気を失った彼を、スゥ達が（正しくは、公子とトキが）神殿に運び、清めの儀式を受けさせた。そして彼が目覚めたとき、彼は目をぱちくりとさせて、言ったのである。

「あれ、どうして私は、こんなところに……？」

と。

どうやら、魔物の種に憑かれていた間の記憶が、すっぱりと抜け落ちていたらしい。全く、幸せなことである。スゥは呆れて声も出なかったが、公子は明るく笑った。

「……よかった。いいんです、何も……気になさることはないですよ、兄上」

つまり公子は、義兄に対しても、今回の事件をなかったことにするつもりらしい。晴れ晴れとして笑う公子の顔を、ワンターは、不思議そうに眺めていた。

こうして、あの一件は、対外的にも、対内的にも、なかったことになった。それが一番、八方丸く収まる完璧な結末なのだ。そう、分かっているが。

『……………。ああ、なんだか思い出したら、馬鹿馬鹿しくなってきたわ』

スゥが、軽く頭を振った。

そして、ワントーから視線を外すと、彼らの斜め後ろに控えていたトキと、目が合った。トキが慌てて、スゥに会釈をする。

この若き大將軍は、事件はなかったことにされたとはいえ、事件後、砦の警備を強化したり、体制を再編したり、色々と行動を取った。ソネットに散々言われたのを気にしたのではなく、自ら省みての行動だった。今現在も、流石に準礼装ではあるが、ぎっちりと鎧を着込んでいる辺り、列席者と言うよりも、警備のつもりでいるらしい。

『相変わらず、真面目ねえ』

スゥがそんなことを考えたとき、神殿の鐘が、再びその音を響かせた。

ざあっと風が吹き、爽やかな緑の匂いを連れてくる。

太陽の光がさざめき、赤い絨毯を輝かせる。

そして、純白のドレスを身に纏った、マリィが姿を現した。

ベール越しで顔はよく見えないが、それでもマリィが満面の笑みを浮かべているのは分かる。明るい光によく似合う表情だと、スゥは思った。

手にしたブーケのギータカスの緑も、白さによく映えて美しい。何から何まで、マリィが語っていた通りの姿である。

彼女の隣には、同じく純白の衣装に身を包んだ公子が立っていた。やや表情は固く見えるのは、流石に緊張しているということだろうか。

マリィが公子に寄り添う。二人は、ゆっくりと赤い絨毯の上を歩き出した。

最初、女同士として出会った公子とマリィは、事件の後、男女としての付き合いを始めた。スゥにとっては、当然といえば当然な成り行きであった。

スゥもソネットも、公子に協力したのはしたが、彼に対して決して優しい応対をしたとは思っていない。そんな状況の中、唯一友好的に接していたマリィに対して、公子が好意を抱いたとしても、不思議ではないと、そう思うのである。

それになによりも、一番始めにスゥが占った結果は、あの出会いが「運命的な出来事」であるということだ。結局、自分の占いは、今日のこの日のことを示していたと考えられる。

『……考えて見れば、私って本当に、良い腕をしてるわよね』

スゥが心の中で自画自賛しているその前を、マリィが通り過ぎる。彼女はちらりと、スゥの方を見たようだった。スゥが笑顔を作って返すと、はにかんだように、少し首を傾げた。

今日のこの日を、どれほど望んでいたのだろうか。親友が醸し出している幸せの空気を、スゥはひしひしと感じていた。

『それにしても、随分と、気の利いたことをしてくれたものよね』

通り過ぎた二人の背中を眺めながら、スゥは更に、思う。

国の公子の結婚式ともなれば、伝統にのっとった、決まりきった形式というものがある。だが、マリィが夢に見、思い描いていたそれを、公子は耳にしていた。そこで公子は、マリィに提案したのである。公的な結婚式は如何ともしがたいが、しかし、私的なものとして、ごく近い者のみで結婚式を行うのはどうだろうか、と。そしてそれを、正式な結婚式の前に設定したのである。

マリィは、この上なく喜んだ。彼とその話をしたというその日、スゥの所に飛んで来て、真っ先に語って聞かせた程に。

と、ここでスゥは、小さく溜息を吐いた。神官長の孫娘、というのも、ある意味大層な肩書きだったが、これからは、マリィは公子夫人である。そうそう今までのように、スゥと会うことは出来なくなるのだろう。何かと差し入れをしてくれることも、なくなる訳だ。

『寂しく……なるけど。でも』

祭壇の前に辿り着き、日の光をいっぱい浴びて、きらきらと輝いて見える親友の背中を、スゥは瞳に映した。

「マリィが望みを叶えたんだもの。しっかり祝ってあげないと、ね」

心に思ったつもりだったが、つい呟きとして声に出していた。隣にいたソネットが、声を聞きとめてスゥの顔を見上げる。だが、彼女は何も言わずに、視線を式へと、光に包まれている二人の姿へと、戻したのだった。

式は、つつがなく終了した。スゥは、マリィと話をしようと思ったが、ずっと生活を共にしてきた神官達に囲まれている彼女に、近づくことは出来なかった。まして、しかめつらしい顔で終始儀式を執り行っていた神官長が、最後に目を潤ませた様子を、スゥは見ていた。口煩く厳しい祖父であったろうが、それも孫娘が可愛いがゆえのことである。その大事な孫娘の晴れ姿には、感慨深いものがあるのだろう。スゥは、幼馴染であるからこそ、この場は遠慮をせざるをえなかったのだ。

こうして、誰と話すことなく神殿を後にしたスゥは、一旦街へと向けた足を返して、森の砦の方へと向かった。

森の砦の守護兵に軽く挨拶をすると、真っ直ぐ最上階まで階段を昇る。そこにあるのは、『星の間』である。

スゥは事件の後、この『星の間』を、掃除し浄化しかつ元の完璧な空間として復活させるべく、働いていた。同じ仕事を、ソネットも出来たであろうが、彼女はトキの為になることなら指一本動かすことすらしないであろう。自然と、スゥの役目となったのである。勿論、スゥにとっては街での占い家業が本業であるから、その片手間仕事ではあったが。

スゥが扉を開くと、初夏の爽やかな風が吹き抜け、彼女の頬を撫でた。

部屋の中央には、机が一つ、窓と平行に据えられていた。雑然と置かれていた大量の物品は撤去され、わずかに書物が残るのみである。それも、壁際の本棚にきちんと収められている。

これまでのスゥの働きで、『星の間』は本来あるべき姿を取り戻していたのである。が、実はまだ、完全ではない。

スゥは、一息つく間もなく、作業を始めた。中央の机に、懐から真っ白い布を取り出すと、その上に香炉を乗せる。そして、香炉に火を着けた。細く白い煙が上がり、渋い匂いが風に乗って広がる。

魔力を高める香を焚くことによって、部屋の持つ力を引き出す。これが、最後の仕上げなのであった。

あとは、香の効果が十分に現れるまで、待つだけである。スゥは、窓辺に移動すると、外の景色を眺めやった。見晴らしは、とても良い。森の木々の眩しい青葉が広がる果てに、鈍い黄金色の鐘が見えた。神殿の鐘である。

「……ふう」

と、つい、溜息が零れた。

『少し疲れた……かしらね』

苦笑いを浮かべて、スゥは、視線を鐘から外した。順に、近くへ。そして、視線は下方へと、向く。

すると、砦の入り口の前で、守護兵と会話をするトキを見つけた。何を話してるのかしら、とスゥが思うよりも早く、トキが顔を上げた。高低差はかなりあるものの、遮るものは何もないので、必然的に、スゥと目が合う。

高い位置にいるので、会釈するのでもどうかしら、とスゥが一瞬、躊躇った。その隙に、トキは慌てた様子で、砦の中へと入ってしまった。

『あら』と思うと同時に、スゥは嫌な予感を感じた。そこで、窓辺から離れ、机の周りの空気を乱さないように部屋の端を通過して、星の間を出る。

ゆっくりと扉を閉めているとき、

「ハワディさん！」

と、息を弾ませたトキが現れた。

予測した通りで、スゥはほっとした。もしスゥが、窓辺でじっとしていたなら、トキは不用意に扉を開き、部屋の空気を乱してしまったかもしれない。魔術に関して全く無知な訳ではないトキだが、彼女の作業の段取りまでは把握していないのだ。

自分の勤と判断の良さに満足しつつ、スゥは、挨拶を口にした。

「こんにちは」

「ハワディさん、どうして、ここに？」

「どうしてって……『星の間』の浄化のお仕事、あとは最後の仕上げだけだということは、お話ししてたでしょう？」

「え、はい、それは伺っていましたが、今日のような日くらい、ゆっくりなさってよろしかったのですよ？」

トキは、スゥが礼服のままなのを見て、言っているようである。既に普段の服装に着替えて

いる彼と比して、どうもそこから、それほどまでに仕事熱心である、と判断したらしい。

けれども実際の所、ただスゥは、無精をただけのことである。今日は式のために、占いの方は休みにしているし、折角森まで来ているのだから、と思いついただけなのだ。

だが、

「あ……えー、でも、今日のような日だからこそ、良いのよ。神殿で、祝福された日ですもの、浄化作業を行うには、最高の状態だわ」

と、口ではそう言っておいた。

勿論トキは、彼女の言葉をまともに受け取り、

「なるほど。……本当に、仕事熱心なのですね」

と感心している。スゥは、それを聞き流すことで、その場を誤魔化した。

「貴方こそ、早々に着替えてご出勤だなんて。仕事熱心じゃなくて？」

ついでに、話をトキの方へとふる。

「い、いえ、私は違う……のです」

トキは、何故か顔を赤らめて否定した。スゥの言葉に照れたというには、反応が顕著過ぎるように思えて、スゥが首を傾げる。

「……あ、あのっ！」

トキが急に、大きな声を出した。驚いて、スゥが彼の顔を見る。と、途端にトキは固まってしまった。沈黙が流れる。

仕方なく、スゥが口を開こうとしたが、その必要はなかった。長い時間を要したが、トキは、ちゃんと次の言葉を吐き出した。

「貴方にお話が、あるのです。本当は、後程、街の方へ伺おうと思っていたのですが、ここでお会いできたので、……その……」

そして再び、言葉を詰ませる。また沈黙が訪れ、今度はスゥが、それを破った。

「いいわ。とりあえず、廊下で立ち話も何だから、どこかに移動しましょうか？」

トキはスゥの提案を受け入れ、二人は、砦の屋上へと移動した。

屋上は、何も遮るものなく森を見渡せる。『星の間』が、占い師として居心地のよい場所なら、季節も天気も良い今日のような日のここは、人間として気分が良い場所である。スゥは、空の青さを軽く見上げて、伸びをした。

「……お疲れですか？」

微笑を含ませて、トキが言った。場の心地よさに彼の存在を忘れていたスゥは、慌てて、しかしそうとは見えないような滑らかな動作で、上げた手を下ろした。

「最後の仕上げ、とおっしゃっていましたがね。もしかして、作業の邪魔してしまったでしょうか？」

トキがスゥを気遣って、言った。そんな風に言われると、スゥ本人は無理せずやっていることなので、却って気後れしてしまう。だから彼女は、彼に苦笑で答えた。

「構わないから、移動したんじゃないの。……今、香を焚いているから、後は終わるのを待つだけなのよ」

「それで、浄化作業は終了ですか？」

「ええ。完了」

スゥが言うと、トキは口をつぐんだ。

「……何？ 何か不都合があるの？」

「あ……あの、そうすると……貴方はもう、ここにはいらっしゃらないんですね？」

今度はスゥが、言葉を詰まらせた。

本音を言えば、彼女が『星の間』の浄化の仕事を引き受けたのには、下心があったのだ。スゥは、『星の間』で占いをしたかったのである。部屋を元通りにすれば、その位のことはさせて貰えるだろうと、計算していたのだ。

ところが、このように話を切り出されては、「これからも来るつもり」だとは、流石に言いにくい。どうかして理由を付けて、自分の要求を言いやすい方向へ話を向ける方法はないか、スゥが思索していると、

「……やっぱり、今日でなくては」

と、俯き気味のトキが、先に口を開いた。それから、ぱっと顔を上げた。

「ハウディさん！」

「は、はい！」

トキが急に声を大きくしたので、スゥも、珍しく驚きを含んだ反応をする。

「貴方をお願いしたいことが、二つ、あります」

トキは硬い表情で、言葉を続けた。

「まず一つ。貴方のことを、スゥ、と名前と呼ばせて下さい」

突然の申し出に、スゥは瞬きをした。

彼は彼女を「ハウディさん」と呼び、随分と丁寧な言葉遣いで話をしていたが、それは彼女が指定したことで、無論無かった。大体、スゥからしてみれば、国境を守る將軍様であるトキが、このように丁寧な対応を彼女にすること自体、不自然と言えるのだ。

だから、彼の真意が良く分からぬままに、スゥは頷いた。

「？ 別に、構わないけど……ゲイン將軍」

「私のことも」

頷かれたにも関わらず、トキが言葉を挟む。

「トキ、と呼んで下さい」

「はあ……」

將軍様を捕まえて、名前を呼び捨てにしてもいいらしい。

『でも、また何故急に、そんなことを？』

と、スゥは、ぼんやりとトキの顔を眺めた。

「それから……」

トキは更に続けて口を動かした。

もう「二つ」言ったじゃない、とスゥが指摘するより早く、トキが続きの言葉を放つ。

「わ、私と、お付き合いして下さいっ」

「……はあ」

気の抜けた相槌を、スゥは打った。そして暫し、辺りに沈黙が流れる。

風が、二人の間を、通り抜ける。

そして漸く、スゥは、トキが言った言葉の意味を理解した。

「え……、はぁ?!」

理解したので、スゥは、口をぽかんと開けて、トキを眺めた。

彼は、頭からつま先まで硬直させている。

これはつまり、告白をされたということらしい。

『……って、ことは……』

星の間の浄化作業が終わることで、彼女が砦に来なくなるかどうか尋ねたのは、彼女が来ることが迷惑だった訳ではない。

スゥに対して終始態度が丁重だったのは、女性に馴れていないからだった訳ではない。

全て、スゥが考えていたような理由からではなかった。トキがスゥに好意を寄せていたということを、示していたのである。

スゥは、右手で頭を抱えるようにして、考え込んだ。

彼女は今まで、自身が誰かの恋愛の対象になるということ、思考の要素に入れたことがなかった。入れる必要もなかったのだ。

『考えてみれば、とっくに気付いてても、当然だったんだわ』

いつも冷静で的確な思考をモットーにしてきたスゥである。実際、迂闊だったと認めざるを得ない。それで彼女は、要するに、自分の手落ちに気付いて落ち込んだのである。

『……って、どうして私相手に、そんな気になるのよ!』

などと思ってみたところで、殆ど逆恨み状態である。そんなことを考えてるとはつゆ知らず、トキが、ゆっくりと言った。

「あ……あの、直ぐに返事を下さらなくても、構いませんから」

スゥが手を少し下げて、トキの方を見る。彼は、ぎこちない微笑で、スゥを見つめていた。

目の前のこの人物は、公子の信頼厚い、將軍様である。砦を守る最高責任者であり、『星の間』の管理する権限を持っている。そして、公子に対して発言力までである。

スゥは、考えた。

もし、彼と親密な存在になるとすれば、『星の間』で占いが出来るかもしれない。その結果を彼に与えることで、公子に働きかけが出来るかもしれない。すなわち、スゥの密かな野望であるところの「国政を左右する占い師」に、近付けるのではないか。

考えて見れば、マリィほどではないにせよ、世間的には、玉の輿と呼ばれるであろう相手だ。それに、まだ年も若く、体も丈夫そうだし、容姿だって良い方だ。性格だって真面目で、少なくとも女遊びなどはしそうにない。

条件としては、悪くないのである。従って、

『……まあ、いいか』

という結論が、導き出された。

スゥは、息継ぎをしてから、顔を正面に向けた。そして、笑顔を作って、言った。

「……私で、よろしければ」

トキの顔が、ぱあっと満面の笑顔に変わると同時に、紅く染まった。

そんな彼の様子を見て、スゥは、

「まあ、いい……か」

と小さく呟いた。

『嫌になったら、別れればいいことだし』などと、余計な言葉を付け加えようとしていたのだが、口に出た言葉は、意識せぬうちに変わっていたのだった。

この時点では、スゥが考えている幸せと、トキが思い描いている幸せは、全く別のかたちをしている。だが、かたちは常が変わってゆくものである。この先、それぞれのかたちに重なる部分が出来たとき、二人の関係も、また違う段階を迎えることがあるかもしれない。

これから起こるかもしれない変革を祝福しているかのように、神殿の鐘の音が、風に乗って二人の元へと届いた。